

## 平成13年度開講総合科目「スポーツへの冒険」について

山田幸雄, 白木仁, 本間三和子, 鍋倉賢治, 嵯峨 寿

Teaching portfolio report of "Adventure into Sport" as multidisciplinary subjects in Tsukuba University 2001 general education programs

Yukio Yamada, Hitoshi Shiraki, Miwako Homma, Yoshiharu Nabekura, Hitoshi Saga

## はじめに

本稿では、本学の「総合科目」のひとつとして開講されている「スポーツへの冒険」について報告する。

筑波大学の一般体育を運営する体育センターの教官を中心に企画されたこの授業は、「メディアに見るスポーツ」(平成11年度)、「スポーツその遺産」(平成12年度)をその前身としており、その両方ともが、「レオナ・プロジェクト」(優れた授業を学生の投票結果に基づき表彰する教育活性化策のひとつで、発案者である当時の江崎玲於奈学長の名で呼ばれる)における総合科目部門のベスト3に選出されている。学生の人気・支持を得ている科目ではあるが、のれんにあぐらをかくことも、同じ内容を繰り返すことも潔しとせず、毎年々々、内容の吟味精選と充実に努め、名称自体もその時々の内実に最も相応しいものに改名してきた。

「スポーツへの冒険 adventure into sport」と銘打たれた平成13年度の授業について、以下、その目的と内容構成および授業成果などを記すことで、今後の総合科目の改善はもとより、一般体育における講義の導入について検討する際の参考資料としたい。

## 1. 授業の目的

本授業が位置づけられている総合科目の制度について、そしてまた、この授業の目的や特徴などについて述べておきたい。さらに、開講当初のオリエンテーションの際に受講生に書かせた、「受講の目的・動機」に関するレポートの中から典型的なもの、あるいはユニークなものをいくつか紹介する。

## 1.1 総合科目について

「スポーツへの冒険」は、本学では「総合科目」と呼ばれるジャンルに属する授業のひとつで、平成13年度は全部で49科目が開講された。いずれの総合科目も通年にわたる講義形式のもので、毎週月曜日の1時限もしくは2時限の時間帯に開設されている。全学の学生は、卒業までに2科目(6単位)を履修しなくてはならない。それ以上の科目・単位を取った場合には、自由科目として卒業要件に認定している学群・学類もあるが、学生のほとんどは、必要最小限の単位を1年次の段階で取得する傾向にある。

総合科目の開設主体は、主として、本学では「学群」あるいは「学類」と呼ばれる教育単位組織(他大学の学部・学科に相当)である。

「スポーツへの冒険」は、体育専門学群が開講する4つの科目のひとつで、月曜2限(10:10~11:25)に開講されている。ちなみに他の3科目の科目名は、「スポーツの技術を考える」「ダイエット」「女性とスポーツ」で、こちらのほうはいずれも月曜1限(8:40~9:55)に開講されている。

## 1.2 「スポーツへの冒険」の授業目的

学生に配付される総合科目の授業計画表(巻末資料参照)には、本授業の「目的・特徴」を下のように謳った。科目選択に際し学生たちは、上級生などからの情報や評判に左右されるだけでなく、シラバスを少なからず活用しているはずである。

実技の伴わないこうした講義形式の授業といえども、真のスポーツファンを育成する格

好の機会であり、一般体育の動機づけや活性化にも寄与しうる可能性がある。受講生の数は少ないよりは多いにこしたことはない。下のシラバスの文言が与える気取った印象は、何はともあれ本科目に対する学生の注目と関心を引きつけたいがための心算によるもので、本授業のオーガナイザー・山田幸雄と4人のナビゲーター(白木仁・本間三和子・鍋倉賢治・嵯峨寿)からなる企画会議一平成12年10月頃よりシラバス原稿の提出期限である13年1月末頃までの間に3回程度開催一を経て成文化された。

スポーツは人間と社会の縮図である。スポーツの世界を訪ねることは従って人間や社会のあり方について考えることにも繋がる。しかしそれ以上に、スポーツによって照らし出されるアスリートの生の輝きが、受講生のひ

### スポーツへの冒険 ADVENTURE INTO SPORT

#### 授業の目的・特徴

この授業の終盤には冬季オリンピック・ソルトレイク大会が始まり、来年の今ごろはサッカーW杯開幕を目前に控えている。地球がスポーツの歓喜に抱擁される2002年に向け、スポーツをより深く愉しむ視線を鍛えてほしい。わざわざスポーツについて考えたり学んだりしなくても、すでに、高校までの体育と部活のおかげでスポーツのルールや戦術などには熟知しているし、加えて、テレビや新聞などのマスメディアが、解説ばかりか劇的な感動すらも手っ取りばやく伝えてくれもする。そのとおりかも知れないが、わたしたちは今回の冒険を通して、新たな知の光によって照らし出されるスポーツやアスリートたちの輝きにしばし心を奪われるといった回心的経験をすることになる。

本授業では、スポーツの深奥に広がる世界を目指し大海原へと小舟を漕ぎ出す。異界探訪のコースを6つ用意した。

- |                        |                |
|------------------------|----------------|
| 1 学期 (前半)オリンピック編       | (後半)メディア・スポーツ編 |
| 2 学期 (前半)偉人編           | (後半)ポリティクス編    |
| 3 学期 (前半)サイエンス・テクノロジー編 | (後半)サッカーW杯編    |

どのコースも頼もしいナビゲーターらがガイドを務めるが、かれらが導いてくれるのは入り口まで。そこから先は各自が英雄のごとく知力と勇気を揮ってアプローチしてほしい。みごと冒険を成し遂げたときには新しいスポーツの価値が発見されると共に、きっと、これまでとは違う自分自身に出会えるはず。それを約束するナビゲーターと講師陣にとってもこの授業は、命がけの冒険なのである。

実施時期	セクション	ナビゲーター
1 学期	前半	オリムピック編 白木 仁 (体育科学系)
	後半	メディア編 嵯峨 寿 (体育科学系)
2 学期	前半	ポリティクス編 本間三和子(体育科学系)
	後半	偉人編 鍋倉 賢治 (体育科学系)
3 学期	前半	サイエンス・テクノロジー編 山田 幸雄 (体育科学系)
	後半	サッカーワールドカップ編 田嶋 幸三 (体育科学系)

とりひとりがつ無限の可能性と今後の道標を照らし出してくれる瞬間が訪れるだろう。「スポーツへの冒険」という授業名には、スポーツを媒介に自己の内面への旅立ちを促そうとの意図が織り込まれているのであり、シラバスでは冒険への自主的な参加を誘っているつもりである。

### 1.3 ナビゲーター制について

究極的には自己の生き方を省みることを狙いとしているとしても、当面はスポーツそのものに迫る努力が求められる。その場合、スポーツは大海の彼方に浮かぶ小島に喩えられ、それに向かって出帆する小舟6艘が用意された。船団長の山田によって指名された船頭(ナビゲーター)らの協議により、目標をめざす各自の航路(担当パートの趣旨)が決まり、必要なクルー(講師)の公募が体育センター所属の教官ならびに準研究員に対して行なわれた。応募者は極めて少なかったという事実がこの冒険の前途多難を予感させたが、最終的に各ナビゲーターが必要な人材の選抜・確保に奔走し、ようやく船出の準備が整った。なお、各セクションの内容構成および講師については、次章あるいはシラバス(巻末資料)を参照されたい。

### 1.4 受講動機

受講生たちのこの授業に対するモチベーションや期待は概して高い。中には、遊覧船での物見遊山気分の者も散見されはななかったが、ともあれナビゲーターと講師を含め総勢188名での船出となった。受講動機の中から、特に目立ったものと本授業の特徴を窺わせる内容のものを部分抜粋により紹介したい。なお、各文末の括弧内には、被引用者の所属する学群・学類、学年を記してある。所属ならびに学年からみた受講生の内訳は次頁に示す通りである。

- ①シラバスを見て、「スポーツをより深く愉しむ視線を鍛える」という点が目に止まり、今までの自分のスポーツに対する価値観とは違ったものが得られるのではないかと思っただけで履修を考えた(人間1年)
- ②高校までの授業で取り扱われてきたスポーツというと、自分がプレーするための実技練習や保健体育に関係するものだけだが、この科目ではスポーツについてその影響や歴史など、多角的な視野から見ることができそうなので興味がわいた(国際1年)
- ③自分でもスポーツを見たりしていて疑問点や、納得のいかない点など普段生活をしていても出てくる。そういうものを、授業を通して解決していったらいいと思う(芸術1年)
- ④この授業は毎年授業名や内容が変わるとは

平成 13 年度「スポーツへの冒険」受講者構成

学 群	学 類	1 年 生	2 年 生	そ の 他	計
第 1 学群	人文	1	4	5	10
	社会	5	1	0	6
	自然	8	2	3	13
第 2 学群	比較文化	6	0	2	8
	日本語・日本文化	1	0	0	1
	人間	6	1	2	9
	生物	1	0	0	1
	生物資源	4	0	1	5
第 3 学群	社会工学	3	0	0	3
	国際総合	9	1	1	11
	情報	1	1	0	2
	工学システム	7	5	5	17
	工学基礎	0	3	0	3
医学専門学群		1	0	0	1
芸術専門学群		32	15	16	63
体育専門学群		2	4	1	7
医療技術短期大学部		5	0	0	5
計		92	37	36	165

いえ、資料映像の多さもさることながら、講義テーマや講師陣も多種多様でいつも飽きることなく受講できる(芸術3年)

⑤中学生の時、私はテニス部に所属していました。コーチは良い先生でしたが、たまに理解に苦しむこともありました。先生の思い出の中に何が詰まっているのかももう一度知りたいと思いました(芸術1年)

⑥私はスポーツ医学を学びたいと考えていて、医学はこれから6年間で数々のことを学ぶが、スポーツについてはあまり学ぶ時間がないので、少しでも多くの時間を、スポーツを学ぶことに費やしたいと考えた(医学1年)

⑦スポーツ用品の開発に関わる仕事をしてみたいと思っているので、大学で、スポーツ工学をやってみたいと思い、スポーツの表面的な部分だけでなく、奥底にある意味などを学んでみたい(工シス2年)

動機の傾向としては、「スポーツが好きだか

ら」という者が若干の例外はあるものの圧倒的に多く、それを前提に、スポーツ観戦の視点を豊富にしたい(観戦学習型)、体育・スポーツにまつわる経験や疑問などについて考えたい(思索志向型)、スポーツに関連する学問分野や職業に進みたい(将来目標関連型)などに類型化できそうである。

## 2. 授業の内容と構成

ここでは、まず、各セクションの趣旨ならびに講義の構成・概要を紹介し、次に、各々の講義に対する学生の反応として、毎回の講義の直後に提出させる感想文(200字程度)の中から目にとまったもの数例を紹介する。最後に、各編に関する総括コメントを掲載する。サッカーワールドカップ編を除きすべて各ナビゲーターが担当パートそれぞれの執筆・編集にあたった。

## 2.1 オリンピック編

(ナビゲーター：白木仁)

### (1)趣旨

2000年に実施されたシドニーオリンピックは、日本と時差がほとんどなかったためにリアルタイムで試合の様子を日本にいながら味わうことができた。日本選手の活躍も生中継で観ることができ、柔道の田村亮子、マラソンの高橋尚子の金メダルに感動したことであろう。また、98年の長野オリンピックにおいても日本選手の活躍に一喜一憂したことであろう。このようにオリンピックの状況は衛星放送、インターネットを通じて観ている側があたかもその場に居るごときの臨場感を味わえるようになってきた。しかし、オリンピックの素晴らしい場面だけではなく、プロ選手の参加、ドーピング問題、人種差別問題、政治問題、放映権問題もクローズアップされてきた。そのために、オリンピックの真の意味・目的が見失われ、オリンピックがマスコミや、商業主義の標的にされ本来の理念がゆがめられてきている。オリンピック編では、今一度オリンピックの精神、歴史を振り返り、オリンピックの本質を掘り下げ、シドニーオリンピックの日本代表を交え現在のオリンピックの現状を踏まえつつその変化を考察しようと企図した。今後のオリンピックの方向性を模索することによって学生一人一人が自身のオリンピック観を持ち、オリンピックというスポーツの祭典をより深く楽しむ視点を与えたいと考えたからである。

### (2) 講義概要と学生の反応

#### ①オリンピックの輝き

(宮下 憲)

●概要：オリンピック憲章に謳われるオリンピックの精神をまさに競技において美しく体现してきたアスリートたちを中心に解説した。内容は、VTRにより古代オリンピアから近代オリンピックまでの発展の過程について概説

し、特に近代オリンピック100年の記憶に刻まれた勇士の物語にふれ、オリンピックの盛況ぶりとそれを取り巻くさまざまな問題（男女差別、人種差別、政治介入、ドーピング問題など）について解説した。

●学生の感想：★オリンピックは古代オリンピックの精神を基に回を重ねるごとに、変化してきたことがわかった。ただ、競うだけでなく友情や連携、フェアプレーを重視するオリンピズムの精神は、まさにオリンピックの一番の意義だと思う(比文3年)★現代のオリンピックはギリシャ人たちの不屈の精神を受け継いでいるだろうか。勝利にこだわるあまりのドーピング、国の代表としての責任の重さ、それらは、純粋な技と技、力と力の戦いにとって不必要なものではないか。私たちは今一度オリンピックの意義を見直すべきだ(芸術3年)★オリンピックが古代から近代に移って、戦いそのものではなく、芸術性や教育性を兼ね備えたものへと変化したことは、時代の変化に対応していった結果であると思った。でも個人的には、今のオリンピックは、マスコミ的な面が多くを占めすぎていると思いました(資源1年)。

#### ②オリンピック精神の記憶

(大西順子，谷川聡，白木仁)

●概要：本学出身のシドニーオリンピック日本代表の陸上競技の谷川選手と競泳の大西選手をゲストに迎え、選手として感じたオリンピックについてエピソードを交え解説して頂いた。谷川選手は、選手としては無名の大学時代の話からオリンピック選手に選考されるまでのいきさつを解説した。大西選手は、教室に銅メダルを持参し、学生らはメダルに触れ大変感激していた。さらに両選手ともにドーピングの問題に関してそれぞれの持論を語ってくれた。

●学生の感想：★感動！かなり感動しました。今まで私の中でオリンピックはテレビの中の

出来事だったので、オリンピック選手にこんなに真近に合えるなんて。スポーツ大好きな私にとって大学入学初の大事件です。「スポーツへの冒険」を履修して本当に良かった。筑波に入学して本当に良かった（比文1年）★世界のトップアスリートに会えて、話を聞いて、しかもメダルが触れてとても感動しました。しかも、2選手のこれまでの人生の話を聞いていると自分もがんばろうという気分になりました（国際1年）★大学の中で体育と芸術はいつも一まとめにされていて、食堂も体専ぼくて、なんか「うーん」と思っていたけれど、実は凄いい人たちがそばにいたことがわかってうれしくなった。体芸万歳（芸術2年）

### ③古代オリンピックの祈り

（真田 久）

●概要：古代ギリシャのオリンピア祭がいかかにして受け継がれ、そして時代を超えて再生したのかについて古代オリンピックにまつわる貴重な資料をもとに考証を試みた。特に、古代オリンピックに焦点を当て、オリンピックの起源について説明し、古代オリンピックが1世紀以上続いたことや、祭典として競争が行われたこと、平和の祈りとしてオリンピックが存在し、オリンピックが行われる際は、休戦されたことなどオリンピックが平和の象徴であったことについて解説した。

●学生の感想：★古代オリンピックは、近代オリンピックの商業主義などのようにスポーツから離れた面はなく、純粋に神への誠意、豊穡への祈り、身体を磨くといった面が強く、これこそ「オリンピックの原点」だと思いました（比文1年）★オリンピックがIOCなどのメンバーの個人的な利益や政治的圧力によって左右されてしまって本来の意味を見失っている。如何にオリンピックのその意味を大切にしていかがが我々に残された近代オリンピックの課題なのかもしれない（国際2年）★スポーツはいつの時代も平和の象徴としてある

ことを知った。オリンピックを生み出したギリシャは古き良き時代を思わせ、文化レベルの高さを印象付ける。しかし、その良き時代にも人々がスポーツにおける不正行為に頭を抱えていたのも事実である（芸術3年）。

### ④オリンピックの挑戦

（阿部生雄）

●概要：古代オリンピックが姿を消し、近代オリンピックの運動が起き、それに深くかわり、近代オリンピックの創始者といわれるクーベルタンについてその生い立ちから、スポーツに対する純粋な思想、そして、近代オリンピックの開始に至るまでの過程を解説した。オリンピックを語るときに欠くことのできないオリंपイズム、スポーツマンシップそしてアマチュアリズムについて解説し、現代のオリンピックに見られる政治介入、商業主義、人種差別、ドーピング問題について現状を基に解説した。

●学生の感想：★近代オリンピックは、理想主義、スポーツの精神と現実（ドーピング、ナショナリズムなど）の狭間で揺れていると思った。競争が激しくなればその競争は国家やほかのものに利用される。一方、倫理観やアマチュアリズムに縛られるとスポーツ本来の目的や楽しみから遠ざかってしまうような気がする（体専1年）★オリンピックは世界が一つになる唯一のイベントだと思う。だからこそスポーツの質が落ちてはならない。プロアマを問わずレベルの高いもの同士がレベルの高いパフォーマンスをしてこそオリンピックは成り立つのではないかと思う（芸専3年）★国際的な平和をスポーツを通じて実現するというオリंपイズムは実現できたらいいと思う。特にオリンピックは国際平和に貢献していると思う。私も将来そういう面で関わっていきたい（国際1年）。

### ⑤オリンピック編フォーラム

●概要：各講義の担当者を招き、オリンピックのさまざまな疑問・問題について学生との討論を行った。その内容は、IOCに関するさまざまな疑惑に関する問題がなぜ起きたのか、そして今後はどうなるのかについて、また、アマチュアリズムは、スポーツにおいて今後は無くなるべきなのか規制するべきなのか、オリンピックを商業主義の手に染めてよいものなのか、さらに、谷川選手、大西選手が熱く語っていたドーピング問題などについて討議が行われた。

●学生の感想：★オリンピックは自己実現の場であるということに賛同したい。作家が文章で、画家が絵画で自己表現するようにアスリートは身体全体で自己表現をする。国を超えて個人を表現する。オリンピックとはそのような場なのだと実感できた(芸術1年)★オリンピックでアスリートたちの背にのしかかっている「国」という足かせがいつか自由になるならば人はいつかオリンピックでより「自分」というものを見直し、解放し、自己向上を図れるときがくるだろう(芸術3年)★今後のオリンピックは、ナショナリズムからグローバリズムへと移っていくのが楽しみだと思った。もっと国際的に自由で柔軟なものになってほしい。オリンピックがますます好きになった。ありがとうございました(比文3年)

### (3)総括コメント

私がオリンピック編のナビゲーターをした理由は、私自身が長野冬季オリンピックならびにシドニーオリンピック本部の役員としてオリンピックに参加した経験から、現場での様々な出来事(選手強化、選手選考、選手の態度、マスコミの対応、競技関係者のオリンピックに対する理念等々)について疑問を抱くようになり、本来のオリンピックはどうあるべきなのかについて自分自身考えてみたいと思ったからです。また、本学学生の中にオ

リンピアンが身近に存在し、オリンピアンは特別な存在ではないことを受講学生に知ってもらうと共に、オリンピック編での講義内容はオリンピック、広くはスポーツをより深く楽しんでもらうための基礎知識を学んでもらうことも目論んでいました。その結果は、学生の感想とレポートから判断するかぎりでは、少しは刺激を与えられたのではないかと自負しています。それは、感想の中に、オリンピックの起源とその成り立ち、理念について初めて詳しく知ることができたということや、遠い存在のオリンピアンやメダルに遭遇できたことへの感動、あるいは、アマチュアリズムの現代スポーツにおける意義、ドーピング問題に対する新たな認識など、実に多くの反応があったことから推測できます。また、受講生の中には、体育専門学群生も含まれており、感想の中でこのようなオムニバスの授業によりオリンピックの流れがつかめたと評価している者もあり、この授業は体育専門学群生にとっては専門科目とは異なった意味の面白さを汲み取ることができるのではないだろうか。

では、私自身の疑問に対する回答は得られたかという点で今だ解明したわけではありませんが、改めてオリンピズムについて再認識させられました。しかし、オリンピックの理念と切っても切れないアマチュアリズムについては、現代の競技スポーツの中では、大いに論議していかなければいけないような気がします。その理由の一つには、オリンピックへの出場権は、世界選手権の順位や、出場回数などの制限があるために、オリンピックへ出場するには、定職にもつげず、収入も不安定な状況で戦わなくてはならず、かつ、高額な海外遠征への出場が義務づけられたりする現実があります。そのためには、競技団体、オリンピック委員会などからの強化費だけではまったく不足であり、何らかの支援をしてくれるスポンサーを見つけるしか方法がないと

思いますので、アマチュア選手に対する金銭的バックアップのシステムの構築、すなわちある意味でのプロ化を現実のものにしていかないかぎり日本人のオリンピックのメダルなど望むべくもないのではないのでしょうか。そうなるとそれはオリンピックでは無くなるのでしょうか。

オリンピック編全体を通じて、オリンピックの理想、理念と現実の競技システムとの間には、多大なギャップが存在するということが明らかになりました。今後オリンピックが存続していくためには何らかの方向転換をしていく必要があると言うことだけは事実のようです。

## 2.2 メディア・スポーツ編

(ナビゲーター：嵯峨寿)

### (1)趣旨

スポーツに関連するメディアといえば、一般的には、テレビや新聞などいわゆるマスメディアを駆使してスポーツ報道に携わるテレビ局や新聞社あるいはジャーナリスト個人を連想するだろうが、スポーツのメディアをそれほど矮小化してとらえる通俗的な認識にささやかながらも抵抗を試みたい意図もあって、むしろスポーツの何某かを表象しうるもの総てをメディアと考えてみた。古代ギリシャの競技風景を今に伝える壺絵や詩歌もスポーツのメディアであるし、近代に登場した写真や映画、そして広告や彫刻や建築などもスポーツのメディアとみなしうるのではないか。そして、スポーツが最もスポーツらしく現象する競技会すなわちスポーツイベントも人々の注目を集めるようになってそれ自体が何らかのメッセージを担うメディアとして、例えば企業の広報宣伝の媒体などに活用されている。本編では、スポーツがいかなるものかを表象するメディアとして、ナイキのテレビコマーシャルならびに、絵画をはじめとする美術を取り上げることにした。また、スポーツのメ

ディアとしての特徴を、オリンピックならびにアメリカンフットボールのスーパーボウルの事例から浮き彫りにしてみることを狙いとした。

### (2)講義概要と学生の反応

#### ① CM にみるスポーツ

—NIKE の戦略(道上静香・嵯峨寿)

●概要：広告主であるナイキ社の創業者フィル・ナイト、広告代理店ワイデン&ケネディ社のダン・ワイデンそしてナイキガイと呼ばれるナイキスピリッツを体現するアスリート、この三者の核融合によって生まれるCMは、単なる商品の宣伝を超えてスポーツそのものに関する something great を感じさせるが、はたしてそれによって何を訴えているのだろうか。モニカ・セレスが出演する《トップシード篇》に秘められたメッセージについて、絶頂期の彼女を突然襲った不幸な事件などを参照し解説が試みられた(道上)。

●学生の感想：★「トップシード篇」を観て感動しました。モニカ・セレス選手の事件のことは知っていたので、当時の記憶が蘇りました(自然4年)★モニカ・セレスの精神力の強さにすごく感動した。過去の事件を克服できたからこそ、テニスがまた本当に楽しくできるのだと思う。人間としての精神の強さを教えてくれているのだと感じた(芸術1年)★96年のナイキコマーシャル、トップシード篇には、プロテニス選手のモニカ・セレスが出演している。彼女は93年に背中をナイフで刺され、闘病生活を送るが、このCMは彼女の復活後に作られたものである。CMの中では、セレス選手が追われていることになっている。これは、色々なものを意味していると思う。プレッシャー、人間の弱み、あるいはセレス選手にとっては具体的な犯人など。しかし、こういう状況の中でも人間は挑戦し、戦わなければならないということをナイキは伝えようとしているのだと思う。“Just do it”の“it”



はあらゆる目標・挑戦の意味にとれる。このメッセージを伝えるにあたって、事件にあいながら復活したセレス選手を象徴として使ったのではないだろうか(国際1年)★ダン・ワイデンの広告哲学と、最後のトップシード篇を見て、スポーツは、大きい意味で、生きることの素晴らしさ、大切さを人々に示す方法の1つだと感じた。現代のように、ぎりぎりの地点で本気で何かを成す、“生”の触れ合いがなくなりつつある環境で、ナイキCMはそれを私達に与えてくれる。登場するアスリート達は、自分達の人生をかけて生きることの大切さを体現しており、だからこそ、常に新鮮な感動を私達に与えるのだ(芸術3年)★モニカ・セレスのCMが大変印象的でした。こういう風に苦難を乗り越えた人のストーリーというのは、何か説教くさくなりがちであまり好きではないが、このCMはモニカ・セレスが笑顔で挑戦するというところが最高にかっこいい(芸術1年)★興味のあるスポーツマーケティングの分野だったので、いつにも増して集中していた。セレスの話聞いて、レベルは全く違うが自分のことと重ね合わせた。自分の行き着いたところがセレスと同じで、家族や友人を大切にしようとして再確認できた。トップシード篇に隠されたメッセージとは、私の考えでは、常に前進すること、笑顔とポジティブさを忘れないこと、そして、困難に必ず打ち勝てるという信念だと思った(比文1年)

## ②スポーツイベントのメディアバリュー

(松元剛・嵯峨寿)

●概要：競技会は勝敗や技の卓越性を競い合う場であるのは当然のことのようだが、それを超越するようなカタリーナ・ピットのリレハンメル五輪(1994年)での演技は、いかなる意味で「勇気ある挑戦」に値するかを考えるヒントが示めされた(嵯峨)。また、アメリカンフットボールの世界一を決めるスーパ

ーボウルの運営や演出等に表われたアメリカらしさが紹介され(松元)、これによって、わが国のスポーツ文化とりわけテレビによるスポーツ放送とその視聴のあり方における後進性が図らずも浮き彫りにされる結果となった。●学生の感想：★カタリーナ・ピットの演技を見て、涙が止まらないのだ。スポーツを見て涙を流したのは、生まれて初めてかもしれない(芸術4年)★全世界の人々が注目する祭典で反戦を訴えるのはリスクがある。敢えて実行した彼女の勇気は偉大だ(国際1年)★ピットの演技に深い感銘を受けた。五輪という大舞台でメダルへの欲求ではなく、平和への希求を全世界に訴えたという意味で「勇気ある挑戦」といえる。彼女の言葉に「スポーツで何かを変えられるとは思わない。ただ一瞬でも何かを感じてくれたらいい」とあったが、彼女がリンクにいる間、人々は彼女に魅き込まれただろうし、少なからず平和に関して何かを考えたのではないだろうか。スポーツがスポーツ以上の力をもった瞬間である(不明)★スポーツは我々にとってエンターテイメントとしての役割のみではなく、例えばピットの反戦を訴えた演技のように何かしらのメッセージを含んでいる。それをより多くの人に伝えるためには、やはり高度に発達したメディアは必要だし、そのメディアによって伝えられたものの中からメッセージを読み取ることも私達には大切な事だ(比文1年)★メディアとしてのスポーツが人に何かを伝える時、それは言語を必要としない直接的なメッセージを伝達できる(芸術2年)★人にものごとを伝えるというのは言葉や文字だけでなく、こんな表現の仕方もあるのだと思った(人間1年)★フィギュアスケートにしてもアメフトにしても、メディアとしてのそれは大変大きな力を持っていることに驚いた。スポーツには競技者や主催者がそれに託した気持ちというものがある。私達は込められた意図をそこまで深く感じているとは言い難いが(芸術2年)★

試合が始まる何時間も前から番組が組めるのも、国民全体がスーパーボウルを支持しているからできることで、日本のスポーツにも何かそういうものがあればいい(人文2年)★スーパーボウルがゲームを中断してまでCMを入れるのは行き過ぎではないか。スポーツの本質を失っているような気がする(人文2年)

### ④美術におけるスポーツ

一再現と表現について(太田圭)

●概要：テレビや映画などのような動画映像の技術が進歩し、スポーツの再現性は飛躍的に高まったが、それでは絵画やポスター、彫刻などの美術はスポーツの運動や躍動をどのような技法によって再現または表現してきたのか。歴代の画家や講師自らが描いた絵画ならびに長野オリンピック(1998年)の公式ポスターなどを例に、写実性や再現性では写真や動画に劣るそれらのメディアの特性や独特な味わいなどの所在を学んだ。さらに、スポーツやアスリートをモチーフにして何かを表現しようとする画家の才気に直に触れる機会となった。

●学生の感想：★スポーツをしている姿は何のスポーツであれとても美しいものなので、それを美術として形に残すというのはとても自然なことだと思う(工学1年)★人の美しさを表現する最も適した手段としてスポーツをしている姿が選ばれるのは今も昔も変わらない。スポーツを見ていると、その肉体に、そのプレーに、芸術性を感じるということは古代から変わらない感情だ(芸術3年)★絵や彫刻は止まったもので、一瞬しか描けないけど、一瞬以上を描かねばいけないのが大変だ(人文1年)★芸術で人間の動きを表現する方法がたくさんあることを初めて知った(国際1年)★スポーツ選手の鍛え抜かれた肉体は確かに芸術作品にも匹敵すると思う。オリンピックはスポーツの祭典だがそういう意味では芸術の祭典でもある(比文1年)★スポーツがアート

として形になると、静止したものであるにもかかわらず、その中に動きが見えるのがとても魅力的だ(芸術3年)★スポーツとはダイナミックであり、「動」の美しさを持つものである。美術は、形を半永久的にとどめるいわば「静」の美しさをもつ。しかし、スポーツを美術に置き換えて表現した時、一瞬の「動」の美しさは永遠の美となる(芸術3年)★「オリンピックと美術」というテーマでまず思いついたのは開会式の各国の衣装。それぞれの国の伝統的な民族衣装を見るのが毎回楽しみ(医短1年)★人の身体の形や動きは美そのものなのだと思います。彫刻やデッサンでも人体を形づくったり描くのは人体が美しいからなのだ。人の身体のラインや色、感触などは他のどこにもない不思議なものであり、その身体を動かすことによって様々な動作をすることが可能である人間は偉大だと思った(芸術1年)★古代ギリシャの人々はなぜ壺にあのような絵を描いたのだろうか？あの壺が装飾目的で作られたのだとしたら、絵の対象であるスポーツは単に技術の向上を目的としたものではなく、芸術的要素も含まれたものとして認識されていたのだろうか(国際1年)★絵画で表現される動きは、ときに実際に見るものよりも強烈な印象を与える。だからスポーツの素晴らしさを少し違った形で伝えることができるのだろう(医学1年)★選手の一瞬一瞬の輝きをとどめておいてくれる美術の素晴らしい技術と作品には感謝、感動する(体育1年)★芸術によってスポーツの素晴らしさがもつと理解されたら良いと思う(比文1年)

### (3)総括コメント

マスメディアを操作する新聞社やテレビ局やジャーナリストだけがスポーツの「メディア」だという一般の通俗的理解を断ち切って、スポーツそれ自体がメディアとなる可能性や、さらにはアスリートこそが何よりスポーツの核心的なメディアたりうることに注意を向け

ることができたのではないか。新聞やテレビによるスポーツの報道や放送についての分析、そしてそれに基づくメディア批判の教育も大事かも知れないが、それはこの授業全体を通して結果的に修得できるだろうし、授業が終わる頃には、中田英寿にムシケラ呼ばわりされるマスコミの愚かしさに抵抗しうる感覚も磨かれたにちがいない。当編では、スケジュールの関係で、美術(絵画・彫刻など)や広告といったメディアにみるスポーツに限定されたが、今後は、古代ギリシャの詩人ピンダロスなどによって詠われた競技祝勝歌(エピーキオン)をはじめとする詩歌や音楽、さらにはスポーツの殿堂のごとき威容を誇るナイキ本社ビル(ワールドキャンパス)など建築物のスポーツメディアとしての側面、演劇や文学などに描写されるスポーツの比喩的意味などについても取り上げる価値はあるし、あるいは、『炎のランナー』のようなスポーツ映画の名作をじっくり鑑賞する静かな時間があってもいいのではないか。

## 2.3 ポリティクス編

(ナビゲーター：本間三和子)

### (1)趣旨

1968年メキシコオリンピック、2人の黒人メダリストが表彰台で靴を脱ぎ、黒手袋をした拳を天に突き上げた。平和への無言の抗議であった。1996年アトランタ、ゲイを公言した飛込選手が自分のコーチと訴訟沙汰になり、世間から非情なパッシングを受けながら決勝に臨んだ。2000年シドニー、先住民出身選手がアポリジニ旗を掲げてウィニングランした。イデオロギー、民族、人種、ジェンダー、アマ・プロ問題、そしてドーピング……。このユニットでは、スポーツというレンズを通して人間の生き様、人間の本質を探りたい。スポーツの在り方を問い直したい。

### (2)講義概要と学生の反応

## ①採点競技の政治学

(本間三和子)

●概要：採点競技のジャッジと競技の在り方について、自らの審判体験をふまえて講義した。一度、下されたジャッジは何があっても覆されるべきではないこと、また、政治的な思慮が含まれるのが採点競技の宿命であること、主観で判断することこそ採点競技の面白さであることを説明した。私が、自分自身迷いながらナショナルバイアスのかかった採点をした経験を話したことで、学生からは「ショックだった」「衝撃的だった」「先生は間違っている」という感想が多く寄せられた。

●学生の感想：★審判員は独立してジャッジすべき(医短1年, 芸術1年, 自然1年)★本間先生がジュニア世界選手権で、故意に日本に高い得点をつけたことは間違っている。一人の人間、一人のジャッジとして、してはいけないことである(芸術1年, 工シス1年, 国際1年, 人間1年, 芸術1年, 資源1年, 芸術2年)★審判員はとてつらい立場で、審判するというのがとても難しいことがよくわかった(医短1年, 芸術1年, 自然1年)★ジャッジがいかに難しく重い意味を持っているのかを思い知らされた(芸術1年, 工シス1年, 国際1年, 人間1年, 資源1年, 芸術2年)★採点競技が公平にジャッジされていないという事実が驚きだった(芸術1年, 資源1年, 人間1年)★審判のナショナリズムは仕方ないのではないか(工シス1年, 資源1年, 芸術2年)★審判員は人間なので、主観が入っても仕方がない(芸術1年)★機械が審判しないところに、面白さがあるように思う(工シス1年, 人間1年, 芸術2年)★審判員を査定するシステムがあることに驚いた(芸術1年, 国際1年, 資源1年, 芸術2年)★科学的分析はすばらしかった。

## ②身体の所有権

(近藤良亨)

●概要：この授業では、3つの題材を用いて、身体の所有権がだれにあるのかを学生に問いかけた。ひとつは、プロボクシングの辰吉選手とJBCという組織の対立の話。辰吉選手は網膜剝離のためJBCから試合の実施不可が言い渡されたが、その後JBCは彼のために特例ルールを設け、辰吉の挑戦を認めた。彼には妻も子どももいる。彼の身体の所有権はいずこに？ 2つめは、薬(筋肉増強剤等)を使って人造的な身体を造り出すことに夢を抱いている青年、山本氏の話。薬の副作用をわかっているにもかかわらず、アンナチュラルな身体をパーフェクトと信じ、世界ボディビル大会で世界一を目指す男の物語である。3つめは、メイヘムという殺し合いによって報賞を得るゲームの話。仮にこのようなゲームが社会で認められたらどうなるだろうか、と問いかけた。

●学生の感想：

<JBCと辰吉選手の対立>

★たとえ失明しても続けたいというのは、辰吉本人の自由である。JBCは辰吉の挑戦を認めるべきである★JBCが辰吉のために、特例ルールを設けたのはよくない。JBCはルールを守るべきだ★家族がいるのであるから、辰吉はそれをよく考えるべきである。

<アンナチュラルな身体を目指す選手>

★改造美は人間の美とは違う★薬で作った身体の何が美しいのか理解できない★彼の価値観が理解できない★奥さんの気持ちを考えたら、やるべきではない★気持ち悪い。怖い。

<メイヘム>

★殺人ゲームによって報償を得るというのは反対である。あつてはならない★世の中の秩序が乱れ、危険である。社会がめちゃくちゃになってしまう★殺し合いのゲームなど、人間がやるべきものではない★またそれを見て喜んでいるものがいたとしたら、それは人間ではない★メイヘムはスポーツではない。スポーツにはルールがある★やりたいものは勝手にやればいいと思う★遺された家族や周囲

の人のことを考えれば、やるべきではない★自己決定権について考えさせられた。

### ③コロニアリズム

一大英帝国の亡霊(山田幸雄)

●概要：ウィンブルドンテニスの格式高さと伝統を裏付ける歴史的背景を、映像を用いながら紹介した。

●学生の感想：★ウィンブルドンの格式の高さと伝統の裏に、関係者の努力や演出があることを知った(資源1年,比文1年,医短1年,国情1年)★王室との関係が深いことや、芝のコートが年間2週間しか使われず、そのために毎日手入れされているというのが印象的だった(自然1年,芸術1年,人間1年)★ロッカールームの使用法が階級性になっていることに驚いた(芸術1年)★昔の女性のテニスの格好がロングスカートであることに驚いた(比文1年,芸術1年)★テニスの上品さの歴史的背景が読み取れた(工シス1年)★アメリカとイギリスのスポーツの考え方、とらえ方の違いを感じた。アメリカは大衆性、商業性、エンターテインメント性。イギリスは伝統的、保守的(資源1年,人間1年,日日1年,社会1年,工シス1年)

### ④スポーツと民族対立

(阿部一佳)

●概要：「政治に翻弄されるスポーツをぎりぎりのところで支える(た)二人の男の物語を紹介したい。一つは、これから始まる政治との戦いを決意している物語ーピクシーことストイコピッチーであり、もう一つは、既にその戦い終えた男の物語ー孫基禎(韓国)ーである。」(以上阿部先生の講義資料からの引用)

●学生の感想：★スポーツと政治は切り離して考えるべきと思う(医短1年,芸術1年,工シス1年,芸術3年,国際1年,生物1年,人間1年,工シス2年,自然2年,芸術3年)★スポーツと政治は切り離すべきと思うが、

それは難しいことだと思う(国際1年, 人間2年, 人文2年, 芸術3年)★スポーツが国と国, 世界を結びつかせることが出来るなんてすごい(医短1年)★スポーツにこれほど政治が影響するのは何故だろう(芸術1年)★スポーツと政治は切り離して考えるべきと思うがそれは不可能なのではないだろうか。スポーツは政治を切り離すどころか, むしろ政治を含む自分の国というものを(日ごろ意識しないにもかかわらず)強く意識させる働きがあるからだ(人文3年)★戦争がひとりの有能なスポーツ選手の一生を台なしにしたという事実を知って, やりきれない思いがした(芸術1年)★スポーツが人々を結びつけるものであるために, 私たちはスポーツを通して政治や世界の問題をもっと考えていかなければならないと感じた(国際1年)★スポーツによって交流する。スポーツとは文化の底の底まで理解するツールである(国際1年)★政治ができないことをスポーツはできるのではないのでしょうか。来年(2002年サッカーW杯)に期待したい(社工1年)★W杯については政治とスポーツは切り離して行うべきだと思います。スポーツの場面で過去の歴史的経緯を持ち出しても得るものがないからです(日日1年)

### (3)総括コメント

ポリティクス編を通して次のようなことを感じた。

- ・スポーツに政治的な影響が及んでいることをよしとする学生はいない。
- ・学生は, スポーツはクリーンで純粋なものだと信じており, またそうあるべきだと考えている。
- ・スポーツはパフォーマンスのみで勝敗が決定されるべきであると考える学生が大勢である。
- ・学生はメディアの情報を一方的に(鵜のみに)理解する。学生は, メディア以外からの情報入手手法がなく, スポーツの表面的な部分しか

知らない。

・スポーツの本質を語った時に, それを理解する能力, 理解しうるバックグラウンドの知識が乏しい。

・自分達の知っていること(つまりメディアからの情報)は表の情報であり, スポーツに深く関わっている者の考え方や見方を紹介すると, それは「スポーツの裏側を教えてくれた」ということになる。

・スポーツの全体構造を理解していない。

上記は, 学生の反応から感じたことを羅列したものだが, 自分自身の選手, コーチ, ジャッジ, ジャッジ査定員という豊富な現場経験から達した結論(考え方)を1回限りの講義で正確に伝えることは不可能だということを感じた。そういう意味では, 私の授業の展開方法と内容に問題があったと反省している。そしてその一方で, 学生の純粋な反応を得て, 私なりに採点競技がどうあるべきかを問い直す絶好の機会を得た。その意味では, この講義を行って大変良かったと考えている。

2002年2月, タイムリーにもソルトレイクシティオリンピック(2002年2月)でフィギュアスケート審判不正疑惑<sup>44)</sup>が浮上した。この事件はずいぶん世の中を賑わし, 「オリンピックに採点競技はいらない」という声まで聞かれた。採点競技に関わるものとしては, まさに崖っぷちに立たされた感であった。最初にこの事件を耳にしたとき, 「恐れていたことが起きた」という思いと, 「起きてはならないことが起きた」という思いが交錯した。

学生にとってこの事件は「起こるべくして起きた」事件だったようだ。ソルトレイクシティの審判疑惑が表面化した時, まっさきに私の講義を思い出したという内容のレポートが多数寄せられた。そして, 予想通り, 私の考え方に対する批判が数多くみられた。

そして, 自分の行った講義「採点競技の政治学」と, ソルトレイクシティの一件によって, 採点競技はどうあるべきかという問いに

対して、ついに私は確固たる答えを見いだした。それを最後に報告したい。

『競技は、同じ土俵で同じ尺度で相対的に判定されることが基本である。そこに政治力というパフォーマンスとは別のものが影響するのは、本来のあるべき姿ではない。』

毎日汗水流して練習に取り組んできても、パフォーマンスの向上が見えても、それが結果として表れないのであれば、コーチ、選手にとってこれほどむなしいものはない。「選手やコーチが頑張った分だけ返ってくる」、そんな競技に近づきたい。これが長くトップ選手として泳いできた私の純粋な思いである。

私はシンクロに深く関わるひとりとして、シンクロを適切な方向に導く責務を負っている。採点競技としてのシンクロをより魅力的な競技にすべく、どんな問題にも屈することなく、全力を尽くしたい。』

註1) ソルトレイクシティ五輪フィギュアスケートのペア・フリーでロシアペアがカナダペアを僅差で抑えて優勝したが、判定に疑問が湧き起こり、フランスの審判員が不正な圧力を受けていたことを認めた。国際オリンピック委員会(IOC)と国際スケート連合(ISU)は、カナダペアにも金メダルを授与し、当該審判員を資格停止処分にした。疑惑の背景として、他のスケート演技での得点の裏取引や、ISUの技術審査部門での選挙をめぐる思惑があったのではないかと指摘されているが、真相は究明されないまま現在に至っている。

## 2.4 スポーツの偉人編

(ナビゲーター：鍋倉賢治)

### (1)趣旨

スポーツの魅力を語るとき、偉大な英雄(ヒーロー、ヒロイン)を抜きに語ることはできない。このパートでは、ヒーローたちの活躍を通して、そのスポーツの本質や深遠を探り、魅力に迫ってみたいと考えた。各回の講義で

は一つの種目をテーマにし、可能な限りの対比できるような複数(時代、キャラクター、成績など)のヒーローをとり上げた。

### (2)講義概要と学生の反応

#### ①限りない自己との対話

—マラソン(鍋倉賢治)

●概要：人はなぜ走るのか？肉体の極限まで酷使するマラソンは、「コントロールのスポーツ」という意味で最も人間的であり、最も知性的なスポーツの一つなのである。「もう走れません」という遺書とともに自らの生を絶った東京五輪銅メダリストの円谷幸吉と、シドニー五輪金メダルに輝いた高橋尚子の新たな挑戦を中心に、マラソンの本質やその魅力に迫った。

●学生の感想：★最初、マラソンとは「私には興味のない」スポーツである、と書いた。それを授業が進むなかで、「絶対にやりたくない」と直さねばならなかった。マラソン選手の意志の強さの迫りに押されその凄さに圧倒された。やるのは嫌だが、見るのは好きになれそうだ(自然1年)★生命を脅かすほどの、こんな過酷で孤独なスポーツは他にあるのだろうか？2時間以上もの間、頼れるのは自分以外になくて、自分自身を最も理解できるスポーツだと思う(人間1年)★高橋尚子さんは、とても気持ちよさそうに走る。高橋さんを見てると、無性に走りたくなる。自分が自分のために走って、それで他人も動かせるなんて、すごいことだと思う(資源1年)

※その他多く見られた意見…「マラソンはまさしく、『限りない自己との対話』である」、「マラソンは過酷で、絶対にやりたくない」、反対に「ぜひマラソンを走ってみたい、自己と対話しながら楽しんでみたい」

#### ②人類最速への挑戦

—100m競走(宮下憲)

●概要：わずか10秒間で勝負を決するスプリ

ンターは、その一瞬のために人生の全てを賭けている。「世界一速い男」という称号に魅せられた二人のスプリンター（カール・ルイスとベン・ジョンソン<sup>註2)</sup>の生き様)を通し100m走の魅力、オリンピック精神、挑戦する意義や尊さなどについて問うた。

註2)ドーピング違反でソウル五輪の金メダル剥奪

●学生の感想：★ルイスの自分自身の目標に向かって自己を高めていくことに喜びを感じ、その結果として獲得した金メダルを誇りに思うという人生の考え方に尊敬の念を抱く(国際1年)★レース後にジョンソンに握手を求めにいった真意が「自分はフェアだ」という主張にあった、ということに驚いた。日本人ならそう思っても内に秘めてしまったり、言葉にするとしても「勝利を称えた」というだろう。ルイスのプライドと強さ、高階まで一流でいられた理由が分かった(人文2年)

\*その他多く見られた意見…「100mは才能の競技と言うけれど、やはり努力がなくては達成できない」「ルイスの人格者、教育者としての一面に対する畏敬」

### ③「一本」を求めて

一柔道(小俣幸嗣)

●概要：不世出の柔道家・山下泰裕を中心に、田村亮子、古賀稔彦らの偉業とそこに至る厳しい過程について解説し、柔道の魅力と本質に迫った。特に山下泰裕の不屈の精神を、負傷をおして出場し金メダルに輝いたロス五輪の決勝<sup>註3)</sup>を中心に紹介した。また、「JUDO」として国際化を推進してきた、柔道の持つ国際性を考えた。

註3)敗れたラシュワンにフェアプレー賞を授与

●学生の感想：★テレビにかじりつきながら観戦する柔道で、一本が決まったときとても気持ちがよい。その試合のために減量をして精神をとぎすまし、練習してきた成果を「一

本」にかけるという大変さを感じられた(人間1年)★フェアプレー賞を受賞したラシュワンは、山下の怪我を攻めればおそらく試合には勝てたであろう。しかし、明らかに自分より不利な相手を倒したところで、一体何が残るのであるのか。負傷した足を攻めないラシュワンを責めるのもおかしいが、批判することはもっとおかしいと思う(国際1年)★何年も何度も勝つこと、これは本当にすごいことだと思う。スポーツはいくら努力してもその日その時その一瞬で自分の全力を出せなければ意味がない。過程も確かに重要だし、それだけで人を感動させることもできるが、やはり結果が伴ってこそ本物で、やっている人の生き甲斐であるはずだ(人文3年)

\*その他…山下泰裕の偉業を知らない学生が多かった。「柔道は精神力である」という意見多数。

### ④剣の達人

一剣道(鍋山隆弘)

●概要：少年から高齢者まで日本で親まれてきた剣道とは何か。平成の達人・宮崎正裕を取り上げ、彼が編み出した独特の防御姿勢<sup>註4)</sup>を通し、剣道は勝敗を重視する「スポーツ」なのか、礼と義をつくす武士道につながる「武道」なのかを問いかけ、剣道に特有の「教え」について紹介した。

註4)剣道の教えに反する構え

●学生の感想：★勝つためには、どんどん新しいことを取り入れていかなければならない。いつまでも古い考えにこだわっていれば、どんどん剣道は忘れられていけよう(体育2年)★武道としての剣道を守るべき。武士魂という日本独特の考えは世界の人には理解しにくいと思うので、柔道とは違って世界に出すべきではない。もし出せば、スポーツになってしまう(工シス1年)★柔道はスポーツとしての方向へゆき国際的にも認知されたスポーツとなった。しかし、勝敗で白黒つけるだけが

スポーツではない。現代スポーツが忘れてしまった勝敗以外の部分を思い出させる素敵なスポーツとして剣道はよい見本になるように、今までの伝統を引き継いでくれたらと思う(芸術3年)

\*その他多く見られた意見…「剣道の速さ、気迫に圧倒された」、「剣道家の姿勢、立ち居振る舞いなどへの憧れ」など

## 2.5 サイエンス・テクノロジー編

(ナビゲーター：山田幸雄)

### (1)趣旨

アメリカの同時多発テロ以降厳戒態勢が続いた2002年ソルトレイクシティ冬季オリンピックも閉幕した。日本のマスコミは、前回の長野オリンピックに比べてメダル数が少なくなったことを大きく取り上げていた。日本のマスコミはいつもメダルの数が気になるようだ。

本編では、競技でスポットライトを浴びる選手ではなく、選手の記録の更新、身体の安全等を支えている道具、及びその制作過程に焦点を当て、そこから冬季競技の奥の深さや勝負の厳しさを知り、スポーツへの視点の多様性を養うことを目的とした。冬季スポーツといえば、スキー、スケートである。その2種目の道具に焦点を当てることにした。

### (2)講義概要と学生の反応

#### ①スキー用具の変遷と技術

(井村 仁)

●概要：約4500年前の石器時代のスキー狩人の壁画やズダルスキーという昔の一本ストックスキー等の映像から現在の中心的スキー板となっているカービングスキーまで、滑る技術と用具との関連について考察した。

●学生の感想：★モーターもないロボットでもスキーが出来るのには驚いた。それだけスキーは合理的なのであろう(自然4年・工シス2年)★スキー板にこれほどまでに研究がなさ

れていることに驚いた。スキーヤーだけでなく、スキーを作る人、研究する人がいてこそ。人と人の繋がり的重要性を感じた(芸術2年)★ズダルスキーの回転法には驚いた。また、カーボンが静電気を逃すことやカーボンの使い方の発想には驚いた(体育2年)★誕生当時のスキーは機能的でなかったが、どんどん改良されて素晴らしい性能を持つまでになり、人間てすごいなあと思った(人文2年)★膝に負担が集中する今のスキーに対して、身体への負担が少なくなることも考慮したスキーの開発も必要であろう(国際1年)

#### ②スラップスケート

(湯田淳 博士課程体育科学研究科)

●概要：世界的なトップ選手と日本の一流ジュニア選手におけるスケートの滑走技術の違いや、今までと全く違ったスケート靴といわれるスラップスケートの出現による技術の変わり様について考察した。

●学生の感想：★一流選手の足の動きは、ジュニア選手に比べて非常にスムーズなのに驚いた。しかし、滑っている姿勢はジュニア選手の方が染そうに見えた。一流選手の動きは、相当な筋力が必要なのであろう(芸術3年)★スラップスケートと今までのスケートについて、技術的な解説や力学的な説明を聞いて特徴の違いが理解できた(工シス4年)★人間の力を最大限引き出すためには、靴等の道具の質が大きく関わっているものだなあと感じた。スポーツは、アスリートだけで成り立っているのではないんだなあと思った(芸術1年)★動きの分析、血中乳酸値の測定等、数々の科学的サポート活動には驚いた(体育1年)

#### ③ウェアの革新

(板垣良彦 株式会社デサント)

●概要：スイミングウェアの話から始まり、スピードスケートウェア、アルペンスキー、ノルディックスキー競技のウェアの開発の様



子やその大変さについて、人間対人間としての選手との関わりを通して、開発を行っている様子が伺い知れた。

●学生の感想：★スポーツの世界は、選手だけでなく、メーカーの人たちにとっても大きな戦いの場であるということを実感した(医短1年)★ウエアは、素材、デザインだけでなく、心理的効果まで勝敗に大きく影響することがわかった(芸術1年)★吸湿性、保温性等の優れた繊維の開発は、スポーツウエアだけでなく、私達の普段着にも応用されていることをうれしく思った(国際1年)★規制する協会、競技する選手、支える人々の努力がかみ合っただけで現代スポーツを支えていることに気がついた(国際1年)

### (3)総括コメント

井村、湯田、板垣の3人の講師が、それぞれ得意の分野であるスキー板、アルペンスキーやノルディックスキーのウエア、スピードスケート靴、スピードスケートのウエアについて、初期から今日までの開発の過程を多角的な視点から説明した。競技スポーツの世界には、偉大なアスリートだけでなく、アナザー・ヒーローとしての偉大な脇役がたくさん存在し、活躍していることのすばらしさを本当に実感できた。そして彼らは、極限のスピードを追求し記録を更新するための用具の開発と、選手の身体を障害から守るという記録の追求とは相反する安全性の確保という課題を克服するために、大いなる努力を行っていることを痛感した。ただし、あくまでも主役はアスリートであって、その努力なくして競技スポーツは成り立たないことも事実であるという当たり前のことを語る彼らの謙虚さに感動を覚えた。

## 2.6 サッカーワールドカップ編

(ナビゲーター：田嶋幸三)

### (1)趣旨

2001年に始まったこの授業も年が明け2002年にはいると、いよいよ6月にはワールドカップが日本にやってくる。予選リーグの組み合わせが決まるやただちに、日本の対戦国の戦力分析や勝敗、予想などの、希望的観測をたっぷり含んだウンザリさせられる報道合戦が98年のフランス大会の時と同じようにまともや始まった。ナショナリズムに基づくそんな話題はマスコミにでも任せ、本編では、今回のワールドカップに対する関心と注目をポピュリズム的な立場とは一線を画した角度・視点から喚起することを目指した。

### (2)講義概要と学生の反応

#### ①サポーターカルチャー研究からみたW杯

(清水諭)

●概要：ワールドカップで来日する各国サポーターたちの行動様式は、何よりそれ自体がまた見物といえるほど独特であり、従って異文化を理解する上での恰好の糸口にもなる。授業では、イタリアやイギリス、浦和レッズなどのサポーターに関する実地調査を手がかりに、サポーターカルチャーが表象する事柄についての鮮やかな解説が披露され、なかでも、傍目にはフリーガンとは思えない連中が何らかの刺激をきっかけに突如暴徒化する恐れがあるとの指摘には、理性の象徴とでもいうべき「頭」から最も速く離れて位置する「足」が織り成すサッカーに浸透するある種の抗し難い力を想像した。

●学生の感想：★サッカーを「サポーター」に視点をおいて見るということに新鮮味を覚えた(芸術3年)★世界のサポーターたちのあの激しい行動の裏には、その国の文化やジェンダー、ナショナリティや地理的要因が含まれているなんて…こっちは熱くなりました(人間2年)★W杯サッカーには世界の様々な縮図が見えるような気がした。社会の中の人種・階級・社会制度・ジェンダーといったものを発見し、とても驚いた(比文1年)★サッカー

を通して各国の事情を知ることができるということを感じた。フーリガンに対しては今まで怖いとしか思っていなかったが、愛国心を反映する存在だと感じた(人間1年)★フーリガンが発生するほどサッカーというスポーツには人々の心を動かし、そうした行動をとらせる何かがあるのではないか(社工1年)★フーリガンというのも、もちろん各種メディアから知っていたが、私の知っていたフーリガンはほんの一面であったようだ(自然1年)★日本でいる限り実感が湧かないフーリガンの恐怖だが、今年は本当に直接見られるかも知れない。ワクワクする(自然1年)★フーリガンでないにしても海外のサポーターの暴れる様子は日本とは違わらしく、日本がそれに対応できるかどうか不安(芸術1年)

## ②W杯に期待する心の交流を広げよう

(金貞淑 2002年W杯組織委員会

韓国諮問委員)

●概要：先のポリティクス編では、ベルリン五輪マラソン優勝者の孫基禎選手の物語を通して、日韓関係史の一断面に触れた。ワールドカップ共催お互いが契機に、両国が心の交流を広げるためにはお互いがパートナーに対する理解を深めるよう努めることが第一歩であり、まずは、その国の人々の精神形成に大きく寄与するところの「言葉」に多少なりとも馴染むのがよいだろう。授業では、「ハングルがわかればサッカーは2倍楽しい」(三省堂)をテキストに韓国語の仕組みや簡単な日常会話を習い、最後に、全員で「アリラン」を合唱した。日韓関係の改善・発展を願う金貞淑先生の熱い意気に触れ、両国民ひとりひとりの心の交流にこそ共催成功の鍵があることを痛感した。

●学生の感想：★共催は大きな出来事だ。しかし自分は隣の韓国のことを何も知らない、言葉も知らないことに気づかされた(工シス4年)★韓国に対する興味が湧いた。行ってみた

い(社会1年)★この講義で、私の中の韓国が近くなり、とても韓国に行きたくなりました(比文1年)★ハングルはすごく難しいと思っていたが、びっくりするほど分かりやすいものであることがわかった(自然1年)★私は言語学を学んでいるので、とても興味深かった。言葉を学ぶということはその言葉を話す人の国、文化、生き方など全てを知ることになる(人文3年)★昔、私のクラスに韓国人の子がいたが、彼女は韓国に帰ると日本にいたということにいじめられると言っていました。過去の日本の韓国に対する態度はひどかったが、今は過去のことにとこだわらずに、隣国としてもっと相手を知り交流する時だと思う。そのよい機会がワールドカップだと思った(人間1年)★人と人の出会いや、その交流の不思議さや大切さについて語っていただきました。日韓関係には様々な歴史があり、不幸な事もあったけど、ワールドカップを共催することで、サッカーだけでなく、人と人の交流が進み、両国の過去を越えた新しい歴史を築いていけたらいいと思う(日日1年)★人と人の出合いを大切にすることが大事だと思った。少しでも言葉を交わすことによって心の距離がぐんと近づくことを学んだ。言葉を知ることによってその民族の歴史や文化にも触れることができることが分かった(自然1年)★最後にアリランを習ったが、歌を一つ覚えるだけでもずいぶん交流することが可能なのではないかと思った(比文1年)★私たち日本人はまだ韓国についての知識がありません。日本人にとって、韓国に対する罪悪感というものがまだまだ拭いきれていないからなのかも知れません。金先生がおっしゃっていたように、お互いにコミュニケーションを十分にできるよい機会に、ワールドカップがなることを私も願っています(国際1年)★金貞淑先生のとても力強い話され方を聞きながら、このワールドカップ共催が単なる形だけのものではなく、文化交流、また心の交流と、日本と韓国双方に

とって大きな意味を持つものであってほしい  
と思った。私も韓国の言葉や文化についても  
っと知りたいと思った。それと同時に韓国の  
人たちにも日本についてもっと知ってほしい。  
そうすることで、お互いに心理的にも近い関  
係になっていくことを期待したい(人間1年)  
★言葉を知ることは、民族の歴史、文化、心  
を知ること、そして交流のきっかけになる(体  
育1年)★ワールドカップの日韓共催をただお  
互いの国でそれぞれ試合を行い、経済効果を  
分け合うという(自分の)貧しい考え方を恥ず  
かしく思った。日本によって韓国の人々の心  
に刻まれた傷をお互いに認め、心の交流によ  
り、両国の21世紀の関係を築いていければい  
いと思う(工シス2年)★最初は言葉による日  
韓交流についてお話をされるかと思っていた  
が、最後には、人間として大事なことを教え  
られたような気がした…久しぶりに母親に手  
紙を書いてみようかな(工シス3年)

### ③ with Korea ワールドカップ成功への道

(慎武宏 フリーランススポーツライター)

●概要：「近くて遠い国」と言われる韓国の  
人々は、日本との共催の意義をどうとらえて  
いるのか。ワールドカップへの取り組みは日  
本と韓国でどう違うのか。両国のサッカーや  
それを取り巻く社会状況にも精通する在日朝  
鮮人の慎武宏氏に伺った。共催はたしかに政  
治的妥協の産物で「分催」「競催」などと揶揄  
されはするものの、交流の乏しかった両国の  
草の根レベルの対話を生むきっかけになった。  
このことはもっと評価されるべきであるが、  
ワールドカップはあくまでサッカーの競技大  
会であって、日韓交流が目的でないことも忘  
れてはならない。前回の金先生の講義に続き、  
韓国に親近感を寄せるまたとない機会とな  
った。

●学生の感想：★日本と韓国ではワールドカ  
ップのとらえ方も異なっていることを知りま  
した(工シス1年)★ワールドカップが韓国で

は国家プロジェクトとして大々的に取り組ま  
れていることを初めて知りました(芸術4年)  
★日本人に対する韓国人の見方がわかった。  
なぜ韓国はそんなに日本ばかりにムキになる  
のか不思議であったが、自分の無知が恥ずか  
しくなった。日本が韓国に対して過去に行な  
ったことが今でも韓国の人々の日本観に強く  
刻まれていることに気づかなかった。分催・  
競催という言葉聞いたときは悲しくなった  
が、共催のワールドカップが成功するよう、  
ボランティアをする私には何ができるかを考  
えたい(自然1年)★韓国が「近くて遠い国」  
であることをしみじみと感じた。日韓関係に  
は様々な歴史があり、その歴史の中には悲し  
い出来事もある。しかし、日本人の多くはそ  
の事をあまり知らず韓国人には決して忘れる  
ことのできない出来事になっている。このす  
れ違いが距離を遠くしているのではないかと  
思った。この距離をサッカーが縮めることが  
できるならば素晴らしい(医短1年)★共催は本  
当に意義の多いものだと思う。二つの国が協  
力して国際的大会を成功させようとする動き  
は相互の関係を必ず改善すると確信している。  
何か異質なものが一つになろうとする時、ま  
ずは相互に興味を持ち相手を知ることから全  
てが始まる。また相手に関心を持つことは自  
国について、自分について見つめ直すことに  
もなる(人文3年)★本当の日韓友好への道は  
まだ遠いのが現実だと思う。ただ、両国間の  
距離を乗り越える一番よい方法は、若い世代  
の交流だと思う。W杯はそのためのいいチャ  
ンスだと思う(自然1年)★最近テレビをみて  
いても、日本が韓国に興味を持ち始めてい  
るのがわかる。食の交流、音楽や映画の共同制  
作…しかし講義を聴いて、日本がまずやらな  
くなくてはならないことは、もう一度日本と韓  
国の歴史を見直すことだと思った。何も歴史  
を引きずり、試合に民族感情を持ち込めとい  
う意味ではない。だが、両国の歩み寄りに必要  
なのは、食や芸能面での交流よりも歴史の痛

みを乗り越える事だと思う。日本人はあまりにもその認知度が低い。私も早速、勉強しようと思った(芸術3年)★今、日韓ですごく協調が深まっている。しかし今だからそういうことができるけど、ワールドカップが終わってしまったら何かこのウソっぽい友好関係が終わってしまうのではないかと思うが、そうならないように願っています(芸術1年)★正直、共同開催が発表になった96年、いい感情を抱けなかった。「なぜ韓国なのか。」「なぜ日本だけではだめなのか。」しかし時が経つに連れて日本と韓国がサッカーという一つのスポーツを通して交流を深めていくのを見て、これがきっかけとなり両国がよい関係を築いていくことを期待したい。サッカーはきっかけを与えてくれただけであり、それによって関係が完璧に修復されるということはないだろう。大切なのはその後の互いの歩みと努力であろう(国際1年)

#### ④ワールドカップ 絶対ここに注目!

(田嶋幸三)

●概要：日本代表チームについて、98年フランス大会の敗北から現在までの戦跡を振り返ると共に、トルシエ監督の指導方針や人柄、「フラット・スリー」と称せられる守備方式の長短所、選手を支える充実した広範囲な支援体制、スカウティング活動(対戦予定チームの戦力分析に基づいて有益なコーチング情報を提供する活動)など、ふだんマスコミで報道される機会の少ない話題を中心に、非常に理解しやすい映像資料(パワーポイントやビデオなど)を用い解説された。日本戦を愉しむさらに新たな視点を獲得ことができ、待ち遠しさに一層の拍車がかかった。

●学生の反応：★普段のスポーツニュースなどでは決して聞くことのできない貴重な話を聴けてよかった。戦術について知ることができてサッカーをみる楽しみ方が増えたと思う(医短1年)★今まではボールを持っている選

手しか見ていませんでしたが、ディフェンスラインの説明が私のような素人にもわかるよう説明して下さったので、これからはサッカーを見る目が確実に変わりそうです(芸術3年)★ここまでしっかりとした分析を通して日本代表のサッカーを見たのは初めてで、個々の選手の特徴を知っているだけでは味わうことのできないサッカーのおもしろさに触れることができたように思う(芸術3年)★以前からサッカー観戦が好きでしたが、今回初めてサッカーをどのように見るかを教えてもらったように思う。今までは単純に得点が入って興奮するといったようなものだったが、ゴールにつなげるチームの動きをみる楽しさと、その見るポイントを教えてもらった(国際1年)★サッカーに対する見方が全く変わった気がする。サッカー選手たちは自由にプレーしているのだと思っていたが、あんなにも組織的に戦っているとは思わなかった(社会1年)★新しい発見で一杯の講義だった。様々なシチュエーションに合わせた対処法があるのは勝つためには有効かも知れないが、高校野球の監督の指示みたいな感じがした。応用力はあるのか?選手は、自主的(能動的)な判断はできるのか?(国際1年)★ナイジェリアでのワールドユースでの準優勝、シドニーオリンピックでのベスト8といった最近の日本の躍進が田嶋先生のようなスタッフによって支えられてきたことを理解した(資源1年)★若手の育成が、代表チームの強化の鍵を握っていることに納得しました(国際1年)★サッカーに対してそこまで特別な興味を持ってこなかった私だが、たまに日本代表の試合をテレビで見たりすることはあった。しかし、たぶんサッカー観戦の面白さの半分もおいしいところを味わっていなかったと思う。戦略、それをなしている理論…ほんのちょっとを垣間見たに過ぎないが、その奥深さには興味をひかれた。高校とかの授業でも、実技だけでなく、そういう理論的なことも学びたかった(自然1

年)

### (3)総括コメント

われわれは日本代表のサポーターであると同時に、ひとりひとりが来るワールドカップでは日韓交流の担い手でもある。日韓大会は、日本と韓国の関係改善のために行なわれるものではないが、共催を契機に様々な分野・方面で両国間の親善活動が活発化しており、これを一過性の交流に終わらせたくない。ワールドカップの日韓友好に及ぼす効果はすぐに判定できるものではないが、両国民が互いに相手を理解すると同時に自らを見つめなおす機会でもあり、評価はこれから先の長い歴史のなかで下されるべきだ。それにしても、わずか4回の授業によって、サッカーやワールドカップに強い関心を抱くようになり、そしてこの機会に韓国へ出かけたいとの有志が15人を超えた。さらなる冒険へ旅立とうとする勇気をもったこの若者たちは、韓国の地に実際に立ち、現地の人たちと直に触れ合う中で、大学での授業やテレビ観戦などでは得られない貴重で刺激的な経験をするはずだ。どんな成長を遂げて帰還するのだろうか。鬱屈した日常から自己を解き放つようかれらを刺激して下さった金貞淑先生と慎武宏先生にはこの場を借りてあらためて感謝したい。

(文責 嵯峨寿)

### 3. まとめにかえて

最後に、本授業に関する自己点検・評価が加えられるのが望ましいのだが、評価の方法や視点そのものについては未だ検討されておらず、今後の課題である。

ここでは、3学期の期末試験<sup>(25)</sup>の代わりとして出題した、「この科目を受講して、スポーツに対する見方や考え方などはどう変化したか。また特に印象に残っている授業について書きなさい」というレポート課題の中から、

今後、本授業の評価・改善の資料として参考にすべきと思われるものをいくつか紹介し、まとめに代えたい。

### 註5) 学期末試験について

総合科目では学期末試験を行なうよう一応定められている。しかし「スポーツへの冒険」の場合には、各学期を受け持つ二人のナビゲーターに試験の実施有無ならびに出題に関する判断・決定を委ねることにしている。この授業では既定知識の記憶や習得が目的ではないので、試験とは言っても小論文形式の出題が採られているが、同時一斉に行なわれる場合もあれば随時提出のレポートによる評価もある。3学期末試験の問題は上に示した通りだが、ちなみに1、2学期は次の要領で行なわれた。

《1学期》冬季オリンピック長野大会の公式記録映画を構成する8つの物語の中から、女子フィギュアスケートのルー・チェン選手(中国)のそれを鑑賞させ、この映画が冬季五輪種目の一部の種目と一部の選手しか映してないにもかかわらず「公式記録」に値するかを答えさせた。1学期の前半は、古代オリンピックの起源や現代オリンピックの課題などに関する講義を通してオリンピック憲章やオリンピズムについて学んだし、それを体現するオリンピック選手を招き体験談を聞いた。この公式記録映画が、アスリートの姿を借りてオリンピック精神を謳い上げていることに気づかなくてはならない。

《2学期》ポリティクス編、偉人編ともレポートを課した。各編の課題および出題意図は以下の通りである。

●ポリティクス編 (出題: 本間三和子)  
レポートの課題は、「ポリティクス編の4つの講義から<I liked:>と<I learned:>を述べなさい」とした。「何が良かったか」「何を学んだか」をそれぞれ記述させた理由は、<liked>と<learned>の違いを考えることによって、

4つの講義を改めて思い起こし、各人で整理し直してほしかったからである。「何が良かったか」「何を学んだか」は、それぞれにあてはまる講義ひとつをあげても良いし、4つを総合して全体的な視点で記述してもかまわなかった。ナビゲーターの出題意図は学生の記述内容によく反映されており、十人十色で読みごたえがあった。

●偉人編 (出題：鍋倉賢治)

偉人編のレポートでは以下のテーマを課した。提示した講義(刺激)を学生がどのように受けとめ、興味を膨らませるか、さらにそれを通してスポーツの魅力、ヒーロー像を考えてもらうことを意図した。

「講義で登場した偉人(ヒーロー)のなかで、興味をおぼえた偉人・種目を一人とり上げて、新聞、本、雑誌、インターネットなどの情報を取り寄せる、その上で、その人(種目)を選んだ理由、その講義中に話された内容に対する自分の見解などを述べよ」

3.1 最終レポートにみる

「スポーツへの冒険」の特徴

3学期末試験の答案(レポート)の中から4編を以下に掲載した。この科目の効果を渗ませるものであり、かつ、学生にとっての本授業の意義と価値が窺われるものである。いずれも成績優秀者であり、文末に氏名と所属を明示してある。

①一年間を通して「スポーツへの冒険」という授業は様々な種目を扱ってきた。アメフト、サッカー、マラソン、バスケット、水泳…その種目のどれをとっても、ピックアップされたどの選手を見ても、そこにはその種目の歴史があり、選手の思いがあり、時代背景や技術などがあった。僕は自分の知らないことや時代背景を踏まえた選手の思いなどを知るたびにスポーツのすごさや素晴らしさを感じ、時にはマラソンの韓国人ランナーで日の丸を

背負わされ金メダルをとった孫基禎の物語を聞いた時には少し涙が出てしまうこともありました。僕ら芸術専門学群の学生の中にはスポーツを小バカにしている人も少なくありません。僕も体育だけ得意な人のことをすごいと思うことは少なかったのですが、この授業を通してスポーツの素晴らしさや、その精神性、その政治的観点からのスポーツの力、様々な事実を突きつけられた後では、やはりスポーツというものに対する認識を改めざるをえなくなっていました。スポーツやスポーツ選手ってすげえ涙出るほどかっこいいと素直に考えるようになっていく事に文章を書きながら感じる事ができるようになりました。

(高見逸平・芸術2年)

②一年間の授業を通して、今まで知らなかったスポーツの様々な側面を見ることが出来た。私はスポーツが大好きでこの授業をとったわけだが、多くの先生方の講義を聞く中で、スポーツに対して失望することも多々あった。私にとって一番衝撃だったのは、スポーツと政治の、あまりに深すぎる関係についてであった。例えばベルリンオリンピックがヒトラーやナチスドイツの宣伝のために使われたり、オリンピックそのものの商業主義化や、ユーゴ内戦への制裁措置として国連がユーゴスラビアに対し国際スポーツ大会への参加を停止するなど、スポーツとは本来かけ離れた存在であるはずの政治の介入を知ることにより、私にとってただ美しいだけであったスポーツの世界の、裏の一面を見た気がした。特に驚いたのは、採点競技に大きな政治力が働いていることだ。今回のソルトレイクオリンピックでのフィギュアスケート・ペアの採点問題も話題になったが、純粋な競技力ではなく、政治の力が入ってくるというのは、仕方のないことなのかも知れないが、とても悲しく思う。また、円谷幸吉さんの例のように、スポーツを愛するが故にスポーツに押しつぶされ

てしまった人の話を聞くなど、スポーツの持つとてつもなく大きな力を感じ、少し恐くなった。一年間を通して私はスポーツの負の面に目を向けざるを得なかったが、それでも以前から持っていた、スポーツに対する根本の気持ちは変わらない。スポーツはとても美しく、素晴らしいものだと思う。負の面を知ったからこそ、私の中でスポーツは一層の輝きを増すようになった。スポーツは見る人の心を打つ。それは、スポーツが小説や映画などの作り物などではなく、真剣な勝負の世界であり、アスリート達の人生そのものだからだと思う。たとえどんなに政治が介入しようとも、どんなにドーピングなどの負の面があろうとも、スポーツには、そのすべてを超える力があると思う。「花はどこへ行った」の曲を使い、スケートで全世界に反戦と平和を訴えたカタリーナ・ビットや、自分を信じて戦ってきたカール・ルイスのように。また、最近ではワールドカップを通じて韓国と日本の距離が縮まるなど、スポーツによって素晴らしい結果をもたらされているように思う。スポーツは今まで多くの人々を魅了してきたし、これからもずっと魅了していくだろう。一年間を通して学んだことや感じたことを大切にしながら、これからもスポーツを楽しんでいきたいと思う。(岸部由佳・日日1年)

③私は、はじめ、スポーツを見下していた。単なる身体運動としか捉えておらず、なぜ先生方がこのように熱く語るのか疑問であり、スポーツに対する熱心な研究に無意味さすら感じていた。学問的な意味をスポーツに見出せなかったと言ってもよい。法学や医学、工学や生物学などに比べて、スポーツを学ぶ・探究することは学問的に意味の薄いものであり、単なる嗜好的領域に過ぎないように感じていた。軽い気持ちでとった講義だったのに、自分の意に反して先生方が非常に熱意を持って講義して下さることに戸惑いもあった。し

かし、授業を重ねるにつれ、私の意識は変化していった。単なる身体運動、趣味的なものとは捉えていなかったスポーツが、奥の深い、崇高な行為として感じられるようになってきたのである。オリンピックの歴史やスポーツの偉人について学ぶことによって、スポーツという行為の歴史的な広がりを感じたことが、何より大きなきっかけだった。古代に思いを馳せる時、現代スポーツがより鮮明なものとなって私の眼前にあらわれた。採点競技のもつ問題点や、伝統的スポーツの現代におけるあり方について深く考察することは、私に、スポーツの奥深さを強烈に実感させた。剣道をそれほどまでに大切にし、その理念を受け継ごうとする人がいるということが良い意味でカルチャーショックだった。スポーツを見下すことなどとてもできないと感じたのである。また、今回のソルトレイクオリンピックでは、採点競技についての問題が多く浮上したが、「スポーツへの冒険」で得た視点から自分なりに考察してみることは何と面白いものであったか。自分が今まで知らなかった世界を知ることにより、新たな楽しみを見つけられることができ、非常に興味深かった。またスケートに対する清水選手の姿勢は、私にスポーツの崇高さを実感させた。私はこの授業を受講して本当に正解だったと思っている。上述した以外にもサッカーについての普通では知ることのできないような知識を得ることができたりと、自分の中に、新たなモノの見方を与えてくれるような講義ばかりで、毎回、充実していた。そして、実際は、どんな学問にも、それが学問として成立している限り、学問の意味があると感じた。学問の意味とは、結局のところは、人生をいかに充実したものにできるかという一点に絞られると思う。何のために学ぶのかということが、この講義で少し分かった気がする。そして、人生を充実させるという意味では、スポーツ学は何と興味深い学問であろうか。

④僕は昔からスポーツをするのも見るのも好きでかなり知識をもっていると自負してきた。だが、この講義を通してスポーツの本質、そして裏側を学ぶことでその自信は覆されることになった。例えば採点競技についてである。僕は小さい頃から、サッカーあるいは水泳をやってきたが、採点競技には無縁であった。だからテレビでそのような競技を見ていても、正直、ただ眺めているだけといった状態であった。本間先生のシンクロについての講義を聴くことによりとても興味を持つようになった。「自国を有利に採点するのは常識」という考えは、僕のスポーツ観を変えるものだった。そしてソルトレイクでまさに本間先生の言っていた通りの事件が発覚し、僕はすぐに先生の講義を思い出した。この講義を聴いていなければ、この採点をめぐっての事件について主体的に考えることもなかっただろう。個人的な思いとしては僕は採点者が純粋に自分の主観で平等に採点するべきだと思う。確かに人間である以上母国への愛情や上の者からの圧力など問題点も多いし、採点者全員が平等に採点しないとスポーツがスポーツでなくなってしまう。だがやはりスポーツである以上、子供たちや見ている者の夢を奪うようなことは絶対すべきではないと思う。スポーツはどんなに暗い世の中でも、人々に夢や希望を与えることのできる存在である。というより、それがスポーツの本質なのではないかと思う。テレビであるコメンテーターが「フィギュアはもう競技でなくダンスショーにすべき」と語っていた。これはシンクロなどにもあてはまると思うが、僕は反対である。これまで勝つことを目的に命をかけてがんばっている選手をこの講義では何人も見てきた。彼らの何に僕が感動を覚えたのかというと、確かにその素晴らしい演技もさることながら、やはり勝利への執念や勝敗までの軌跡などにである。

その勝敗をめぐる選手たちの演技は我々一般人に涙をも流させる。アスリートたちの勝利へ向かうあくなき努力が我々をそうさせるのである。フィギュアやシンクロがただのショーになってしまっただけではそれらの感動を味わえなくなるかと思うとさびしすぎる。僕は現在のフィギュアのように競技の部分とショー的な部分を両方そろえるのがベストである(シンクロにはオリンピックでその両方を見たい)と考える。だがやはりこれらの種目が競技として残っていくためには、裏表のない平等な審判の採点が必要だと思う。審判をもっと独立させ、彼(彼女)らの主観で採点できるような環境を整えるべきだろう。もちろん我々の世論をもっと必要だろう。僕はシンクロやフィギュアで、美しい演技もそうだが、勝敗をめぐる選手たちの気持ちやそれからの感動を味わい続けたいのだ。最後になるが、僕はこの採点の問題を講義で聞いた時、衝撃を覚えた。サッカーのストイコビッチ選手が「政治とスポーツは切り離すべき」と述べていたが、その時僕は“切り離すのではなく、スポーツが政治に良い影響を与えてほしい”という感想を持った。だがソルトレイクの事件もそうだが、「政治がスポーツに悪い影響を与えてしまっている」ではないか。これでは僕の考える理想とかけ離れてしまっている。これからはできればスポーツが政治を良い方向へ向かわせるものになってほしい。また、ここまでスポーツについて考えさせてくれた先生方に感謝したい。大好きなスポーツがまた一層大好きになった。(木村陽平・社工1年)

### 3.2 受講動機に応えられたのか

最後のレポートとこの授業の最初(4月)に書かせた「受講動機」とを照らし合わせてみることで、この授業がかれらの当初の要求にどの程度応え得たかを推し量ることもできるのではないかと。



### ①林真紀子(芸術1年)

ーアスリートへの要求が高くなった

●受講動機：「スポーツ」という文字を見れば瞬間的に何らかの反応を示すくらい好きだ。けれども私のスポーツの楽しみ方は、「カッコイー」「キレー」の類です。それとはひと味もふた味も違った目を養っていけることを目標にやっていきたい。

●レポート：オリンピック選手たちはいったい何のためにスポーツをしているのだろうと考えた。国のためなのか、自分の名誉のためなのか、それともただ楽しみでやっているだけなのか。この授業を受ける前まで、私は「国のため」という理由で死ぬ気でオリンピックに出場している選手を批判的な目で見ていた。テレビをつければ「(オリンピック)を楽しめます！」と喋っている選手しかみたことのない時代に育ったため、「国のため」という考え方を理解できなかったのだ。だが、経済先進国を目指し、日本人が意気高揚していた時代では、オリンピックは自国の「強さ」をアピールする絶好のチャンス。それを知ったとき私は自分がその時代のオリンピック選手だったら、日本のみんなを活気づかせるために金メダルをとらなきゃいけないと思うだろうな、と考えました。自分の努力で日本に大きな影響を及ぼす。そう考えると、失敗なんてあってはいけないのだ。今、日本は不景気で沈み気味だ。そういったご時世に開催されたソルトレイクオリンピックで、日本選手はお世辞にも良いと言える結果を出すことはできなかった。日本人の期待に応えることはできなかった。なのに「楽しかったので悔いはない。」みたいな発言を聞くと、「オリンピック選手もスケールが小さくなったなー。」と思うようになった。きっと本心はそうなのかも知れないけれど、「国対国の競争」という色が強いオリンピックでは、もっと国民のために落ち込んでくれよと思ってしまうようになった。少し前に放映されたスポーツ番組で、イ

チローが「自分みたいなスポーツ選手というのは、直接多くの人たちに大きな影響を与えることのできる数少ない職業なので、期待に応えるようがんばっていきたい。」というようなことを言っていた。それを聞いた時、私は鳥肌が立った。デカイ人だと思った。その発言を聞いた後にオリンピックが始まったので余計に個人主義的な選手を「スケールが小さい」と思った。どんな職業に就いても「責任」という言葉はついてまわる。多くの人に夢を与えられるスポーツ選手は多くの人の期待に応える責任があるのだと思う。そういった特殊な立場であることに誇りを持って結果を出せるよう現代オリンピック選手たちになんぼってもらいたい。

### ②柳沢啓介(芸術1年)

ースポーツの無意味な外観の中の輝く意味

●受講動機：1時限目(の総合科目で)は遺伝子のことを学び、自転車にまたがり快走してこの教室に至る。スポーツなんて、何の意味もないし、あまりにも下らない。遺伝子的なレベルでみれば、人間なんて子孫を残すために生きている。なのに、どうして感動するのだろうか。その間に何かヒントが得られればと思って、この授業をとる。

●レポート：スポーツの無意味ばかりを考えていた入学したての僕は、この1年間を通じてスポーツの無意味の意味を考え始めるようになった。興味のあるサッカーやバスケットのゲームを見ているときの興奮した自分の裏に、このスポーツという無意味なシステムを冷めた目で見る自分がいた。人間が勝手にルールを決め、その縛られた制約の中で、やたら走りまわるスポーツ選手。それを、口を開けて傍観する大衆。全てはシステムであり、金を動かすビジネスに見えてしょうがなかった。皆だまされていると思った。システムの中では一人一人の個性や創造性といったものは失われ、スポーツをやる側と見る側という

単純な二元化に組み込まれている。そう感じていたし、実際のスポーツの商業的側面を聞くにつれ、このことも間違っていないと思った。しかしそんな考え方は、スピードスケートの清水選手を見ていると、すごく陳腐で弱々しいものであるという気がしてならなかった。スポーツとはシステムやビジネスといった類の言葉を越えるものがある。その一見無意味なシステムの側面のなかにある意味、ときには圧倒的な感動や、触発する啓蒙を生む意味などを知ることができた。清水選手は、失神するまで練習をしていたことはよく知られている。ただ、これも今までの自分からみると、スピードスケートを盛り上げる一つのファクター、小さいのに強いという魅力的な人材を演じているだけの、スピードスケート社の看板男とでも言うべきか。でもそんな考えをふきとばしたのは、「なぜそこまで自分を痛めつけ続けるのですか」という質問に対する返答であった。「こうしてスケートを続けて、何か見えてくるものがあればそれでいい。」そう彼は言った。そこにはスピードスケート社で働く、度々世界記録を塗り替える優秀な社員といった枠組みから離れ、人生観といったものを、スケートをしながら探究する哲学者に似た姿勢があった。それで僕は考え方を改めた。スポーツの無意味な外観の中には輝く意味がある。それはスポーツ選手だけによるものではない。一般大衆やスタジアムでポップコーンを売っているおじちゃんたちも、皆がスポーツという輝く意味を築いている。アナウンサーも、その人を派遣するテレビ局も、選手のユニフォームを洗う洗濯係も、晩ご飯を作って待っている選手や観客の奥さんも、このようなスポーツを伝えるこの授業も、すべてはスポーツという意味を築いている。スポーツを楽しむということは、その輪の中に100%溶け込むということなのだろう。つべこべ言わず、もっと自分をさらけだし、来るワールドカップを楽しみたい。

### ③久保田真紀(芸術2年)

—スポーツの呪縛的な愉しみ方からの解放

●受講動機：私はスポーツをしない人間なので、みることでしかスポーツに触れることはありません。この講義を受講することで私の中でスポーツに関する見方が変わるのではないかと考え、受講を決めました。

●レポート：一年間を通して様々なスポーツについて少しずつ学んできた。私のように実戦の経験のない者にとって、“本番”の恐ろしさとか非情さは想像によってのみ体験しうるもので、それ以上は無理である。私はそのせいで、講義を聴くときや実際に観戦するとき、自分がスポーツを100%楽しめないのではないかと、という気持ちになってしまう。勝った、負けたという目に見えるものから、さらに一步踏み込んだ世界へは入れないのではないかと感じてきたのだ。しかし、だからこそ見えるものがあるのではないかと最近感じる。先日新聞である投書を読んだ。海外に住む日本人からのものだった。彼はソルトレイクオリンピックの荻原健二のジャンプをテレビで見たそうだ。彼のジャンプを見て、その国のリポーターは「ケンジです。ケンジ・オギワラです。彼は今までに3個の金メダルをもらっている、すばらしい選手です。アルベールビル、リレハンメル、長野と彼は勝ってきている。その彼が今でもオリンピック選手として、日本の代表としてがんばっています。なんとすばらしいことでしょう。」と中継したと言います。それを聞いた投稿者は日本で荻原がそのように評価されなかったことを非常に残念だと書いていました。私はそれを読んだとき、ああ素直で、客観的でとてもよい意見だと感じた。それまでの私はいかに荻原健二の立場で競技にのぞめるか、今、彼はきっとこんな気持ちなんだということを想像することがスポーツをみるということ、楽しむことなんだと思いこんでいる節があった。おかしなこと

だけれども、本気だったのだ。しかし今私は素直に“このひと上手だなあ”とか、単純に感動したり“疲れているんだろうな”とか気楽な意見を言えるようになった。スポーツは客観的に見るほうが楽しい、と今なら言える。スポーツはエンターテインメントなのだとはつきりわかった気がするのだ。私は、自分はスポーツに自信がないために楽しみを限定してしまい、ますます“実戦”を避いものと思っていた。それに気づいた今はとても楽しく簡単に観戦できている。

#### ④平井翔大(社工1年)

●受講動機：自分は、今自分が所属する社会工学類よりも体育専門学群に入りたくらいスポーツに興味をもっていて、将来は何かスポーツに関する仕事に就きたいとも思っている。何とかしてスポーツについて学びたいと思い受講を決意した。日本のスポーツの発展に自分も参加したい。

●レポート：私は、この筑波大学に入学する以前も「スポーツ博士」のようなあだ名で呼ばれていましたが、「スポーツへの冒険」を受講したことによって、それがいかに表面的なものであったかを痛感させられた。(中略)本当に一流と呼ばれる選手や技術者の話を聞くと、自分が想像もしなかったようなレベルで物事を考えているのが分かり、私がこの体育専門学群を何度も受験して失敗し続けた意味も理解できるようになった。今年も体専への転学試験を受け失敗しましたが、この授業によって大学院でもう一度挑戦して、スポーツに何らかの形で関わっていきたいという気持ちというか、意志がより強固なものになりました。

### 3.3 途中で冒険を去った者たち

以下の4名は、開講当初のオリエンテーションで非常に明確な受講動機を抱いていた。それにもかかわらず、途中で冒険を断念して

いる。挫折したのか、それともかれらの高い要求にこの授業が応えられなかったのか、理由は不明である。

①大学で部活に入っており、自分なりにスポーツを楽しんでやっているが、この授業によって違う角度からスポーツを考えてみたいと思った(工学2年)

②自分は様々なスポーツをやってきたけれど、何を楽しみ、何を求めているかが最近わからなくなってきた。この講義でスポーツ本来の姿を学びたい(芸術1年)

③スポーツは人間を魅了する普遍的な価値をもっていると考えている。そういった価値を見つけて、自分なりに評価してみたいという欲求が強くある(人文3年男)

④スピードスケートの清水選手が「人間の限界」について語っているものを読んだことがある。彼はその中で自分をコントロールするもう一人の自分について語っていた。全てを自分で考え、また極限の緊張の中でも冷静なもう一人の自分によってコントロールしている…この姿は、スポーツは熱いものと言うそれまでの私の考えを一変しました。奥が深い。それ以来スポーツマンのコメントが気になって仕方ありません。彼の頭脳に近づいてみたい、それがこの授業を選ぶきっかけになりました(芸術1年女)

このように、動機がかなり具体的で明確であればあるほど、自分の関心あるテーマへ至るまでの途中の話題は退屈に感じられ、意義を見出すのが難しかったのかも知れない。しかしそれは推測の域を出ない以上、追跡調査などによってかれらの意見を聞いてみる必要があるだろう。そうすれば、今後の授業計画にあたって考慮すべき反省点など、われわれが気づいてないこの授業の何か重大な欠陥や問題点が見るみになるかも知れない。

### 3.4 「冒険」の名に値する授業だったか

「もっとめちゃくちゃに壊してほしかった」と授業の物足りなさを率直にぶつけてくれた澤村智子さん(自然1年)のレポートには、「冒険」の真(深)意に対するわれわれナビゲーターの思慮がいかにも浅く、従って講義自体も見かけ倒しのものが少なくなかったという、手厳しいが建設的な批判が込められていて有り難い。少々長いですが、全文を紹介したい。

★スポーツというものは、私にとって今まであまり興味のないものだった。この講義を履修しようと思ったのは、おそらく、「冒険」という言葉に魅きつけられたからだろう。私は冒険したかった。

さて、では果たして、この1年間でその希望は叶えられただろうか。残念ながら、6割がた、というしかない。冒険といっても、色々なとらえ方があると思う。私が冒険にはこれがなくちゃ、と思うものは、「価値観の破壊」である。少しエキセントリックな物言いかも知れないが、私が求めていたものは「未知との遭遇」と、それによる「価値観の破壊」、そして、「新たな価値観の創造」である。6割がた、と先述したが、逆に言えば6割はこの「破壊」を私にもたらしてくれたのだから、むしろ満足したというべきなのかも知れない。

しかし、本心を言うと、もっとめちゃくちゃに壊してほしかった。では、その6割が私のスポーツに対するものの何を壊して、何を創造してくれただろうか。まず、スポーツはフィールドや会場、つまり、行われる場所だけでのものではないということ。(もちろん、練習の場を含むという意味ではない。)つまり、スポーツとは、目に見える世界のことだけを指すのではなく、その奥の目に見えないものも含んでいるということだ。目に見える世界で美しく見えるものも、奥では(裏ともいえる)汚かったり、逆に表ではそうではないのに、舞台裏ではこんなに美しかったのかと驚きも

した。もちろん、美しいままのものも存在した。それは人としての美しさだけではなく、科学的に美しいということも同時に意味する。

次に、スポーツは私が思っていたより、ずっとアカデミックになりえるということ。歴史、科学、倫理…スポーツにまつわる多くのことが、学問として成立しようということに新鮮さを感じた。そして、一番に破壊されたのは、「スポーツ=特に興味なし」という、私の中の図式である。もたらされた破壊の中で、これが一番強力で、しかも、喜ばしいものだった。スポーツは楽しまなくちゃ意味がない。実際に競技をしなくても、会場で観戦しなくても、多分スポーツの話題をもちだして、楽しくおしゃべりするだけでも、スポーツに参加していると言って良いのだと思う。スポーツというものは人によって様々な捉えられ方をする。自分なりのやり方でスポーツというものを冒険してもかまわない、そんな自由さと寛大さがスポーツの最大の魅力ではないだろうか。(澤村智子・自然1年)

### 3.5 体育専攻生に対するインパクト

「スポーツの冒険」の開設主体が体育専門学群であることは、すでに冒頭に述べた。学生たちは、自分の所属する学群・学類が開設する総合科目をなるべく受講しないよう指導されている。「総合科目」で扱われる内容というのは、学年が進むにつれいずれ専門科目としてより詳細に学ぶことになるはず、というのがその理由である。このためか、「スポーツへの冒険」を受講している体育専門学群生は10人足らずである。

しかしそのなかの一人は、毎回の講義直後に必ずといっていいほど講師をつかまえて質問や議論をふっかけては納得するまでは容易に引き下がろうとしない、向学心とバイタリティに溢れた学生である。

★私は体育専門学群生で、いわばスポーツと

いうものを専門的に勉強しています。けれども、体育の専攻生がスポーツをきちんと見ているか、広い視野でスポーツを捉えているか、という私も含め実感として、そんなことはない、と思う毎日です。私がこの授業を取ったきっかけは、来年(今はもう今年ですが)ワールドカップが開催される、その前にワールドカップの話が専門家から聞きたい、といった興味本位、ミーハーな動機からでした。本当は、自分の学類・専門学群の開講する科目を取るべきではない、と言われていたのですが、一年間この授業が私にとっては、体育専門学群の授業ではあまり手の届かなかった、知りたかった話を学ぶことができた、貴重な時間でした。

何が知りたかったのか、それはワールドカップしかりオリンピックしかり、またいろいろな考え方も含めて「今」スポーツ界が何を見、何を考えているのか、というところです。今、この瞬間に。普段の授業では様々な方法論を学んでいます。もちろんそれも大切なのです。ただ、そこで学んだことがどう生かされるのか、どう現実とつながっているのか、といった部分が非常に漠然として、なかなか形になって見えてこないのです。もしかすると、私の授業の理解度が足りないからかもしれません。一年生だからからかもしれません。アスリートではないからからかもしれません。けれど、どの授業も学ぶことばかりなのですが、何か足りないのです。一般の、全学の学生向けの総合科目なので、体育の専攻生には向いていない、と言われることは理解できます。知っている人にとっては知っていることであったり、専門の授業のほうでより深くその内容について学んだということもあったりします。ただ、私たちは普段スポーツへ冒険しているのでしょうか、自分の専門種目以外、伝統的な基礎科目以外に。「今」を知っているのでしょうか。例えば、スキーマの技術革新、ワールドカップの競技以外の話、その他にもこ

の授業で知ることのできた、見ることのできた「視点」は私にはありました。(中略)スポーツの専門家と言われ、学んでいるけれども私たちの知っているものなんてまだまだ一部分でしかないのだな、と痛感しましたし、同時にスポーツの世界を捉えるためには、本当に幅広い視野と知識、そしてスポーツへの愛着が必要なのだとも感じました。また、いろいろな分野から知ることができれば、スポーツに関わることがより深く愉しめるのではないかと、ということも。毎回の授業で、スポーツについて常に考えさせられたり、これからの勉強のスタート点にもなったのではないかと、と思います。そして、もっと自らスポーツへ冒険に出かけることが、スポーツの専門家になるためには今の私には必要なのだと思い知らされました。(佐野晶子・体育1年)

ここにみられる本授業への評価は、体育専門学群の現行のカリキュラムや授業への物足りなさの裏返しであろう。理想が高いうえに生ずる贅沢な不満であるかどうか速断はできないが、いずれにしても、入学したばかりの1年生の学ぶことへの夢や希望を打ち砕くような状況があるようならば、体育専門学群の専門教育に携わっているわれわれナビゲーターとしても打開の努力を惜しむことは許されないはずだ。

### 3.6 一般体育や今後の総合科目への要望

本学の「一般体育」の授業は実技が中心である。クラス合同の講義の時間も用意されてはいるが、年2回程度に過ぎず、内容も限られてくる。一般体育のほうも、従来の実技形式の授業に加え、演習や、「スポーツへの冒険」のような講義形式の授業の開講について検討する価値はあるだろう。その際に、考慮すべき点や学生の要望としてどのようなものがあるか、示唆に富んだレポートをひとつだけ紹介したい。

「スポーツが苦手なこともあって自分一人ではなかなかその世界を知ることは難しいので、この授業を通じてスポーツの魅力を知りたい。」と受講動機に書いた中森志穂さん(芸術1年)は、レポートに次のように書いている。

★私は体育が嫌いでした。体育の時間は嘘について見学してばかりいました。なぜかというと、私は上手に運動をこなすことができないからです。鉄棒や水泳、マラソンどれも人並みの記録を出すことが出来ませんでした。今思うと学校の授業である体育は、授業である以上は点数をつけなければならず、そのためは、できるか、できないかという基準を作り、強制しなければならないという要素が強かったと思います。(中略)学校で授業を受けるということは何かをできるように鍛えるという側面があるけれども、ことスポーツに関しては、楽しみ方が何通りもあるのだから、評価の仕方も何通りもあって良いのではないかと感じています。スポーツは身近なことから国際的なことまで様々な分野で関わっています。子どもと体育との関係もそれを予感させるものであるべきです。私はこの授業を通してスポーツのいろいろな側面を知りました。スポーツに対する苦手意識が少し減ったと思います。来年度は、ぜひ「体育専門学群(体專ツアー)」をやってほしい。私の芸術専門学群とキャンパスの位置は近いけれど、ほとんど交流がなくて少し寂しい気がします。体專の人たちの練習している所や、一日、一年のスケジュールも知りたい。せっかく近いところで素晴らしい質の高いトレーニングをしているのだから生でみるべきです。そして、あのサッカーやバレーでの超人的なプレーがどんな努力のもとに生み出されているのかを知ることによって観戦の楽しみをさらに増したいと思います。(中森志穂・芸術1年)

この他の具体的な要望を拾ってみると、テ

ーマとしては、「障害者スポーツについて」「totoなどのスポーツに関わる賭け事について——競馬や競輪なども含めそれらはスポーツの精神にあてはまるのか」、種目についても、「マイナーなスポーツ種目」や「カーレースやヨットなど学校体育では馴染みのない人気スポーツ」などを取り上げて欲しいとの声もあった。さらに、授業の仕方についても、「毎回の感想文はテーマを決めてはどうか(そうすれば、「面白かった」、「楽しかった」という単純なものにならず、読む先生方も学生の考えから何かを学ぶということがあるのではないか)といった提案が寄せられた。講師については、「オリンピックのメダリストやコーチをはじめ第一線で活躍している著名人の話をもっと聴きたい」といった希望は決して少なくなかった。

### 3.7 《愛講者》の創造に向けて

★(前略)日本は他の国に比べて“観るスポーツ”の文化が定着していない、と言うことを改めて感じた。家族で代々鼎足にしているチームがあったり、街の中にスポーツ観戦目的の居酒屋があり、そこに日常的に人が集まったり、というのは日本ではあまり見られないことだろう。しかし、もうじき開催されるワールドカップは日本にも“観るスポーツ”の文化を定着させるきっかけになるのではないか。どのスポーツでも、強い国というのは選手のレベルが高くてコーチも良い、ということだけでなく、国民がどれだけそのスポーツを認知し、応援しているかということが強く関係しているのではないだろうか。ワールドカップをきっかけに、サッカーだけでなくあらゆるスポーツに日本人が興味を持ち、欧米のように文化として定着するのではないだろうか。またそこに関わってくるのはメディアであり、私達はメディアの情報を鵜呑みにするのではなく、分析的な姿勢で関わることで文化としてのスポーツが定着することを可能

にするのだと思う。(光吉麻衣子・人間3年)

最後のレポートでこのように書いてくれた光吉麻衣子さんは3年生であるにもかかわらずこの授業を受講している。1, 2年次に総合科目の単位を落としているからではない。「友だちに薦められてとってみようと思った。すでに総合科目の単位は足りているのでためらいを感じていたが、今日のオリエンテーションを受けて、スポーツを一步進んだ目でみることができ、本当の意味でスポーツを楽しむことができると感じた。」(受講動機)という理由による。

このように自由科目として受講する学生やリピーター(継続履修者)がいることに甘んずることなく、単位に関係なく受講してくれる「愛講者」を増やしていけるよう一層の改善充実を心がけたい。

おわりに

「スポーツへの冒険」は、平成13年度総合科目として開講された。受講した学生は、第1学群29名、第2学群24名、第3学群36名、医学専門学群1名、芸術専門学群63名、体育専門学群7名、医療技術短期大学部5名、総計165名であった。

1学期オリンピック編、メディア・スポーツ編、2学期偉人編、ポリティクス編、3学期サイエンス・テクノロジー編、サッカーW杯編の6つのコースから構成された。6つのコースは、関連を持って構成されたわけではない。むしろ、6つのコースがそれぞれ独立していて、各コース毎にスポーツへの切り口を広げ、スポーツへのよき理解者を増やしていこうとする試みであるとよき考えるべきである。

各コースのナビゲーターは一般体育を運営する体育センターの教官を中心に構成された。

また、体育センターの教官に6つのコースにあった講義案を公募したが、応募はなかった。そのため、各ナビゲーターが、コースに見合った講師を決めた。

授業のポイントとしては、教官は映像を効果的に使い、スポーツの素晴らしさ、奥行き、複雑さなどを伝えること、また、学生は毎時間最後の5分間で200字程度のレポートを書くことであった。レポートの課題は講師が決めた。レポートは、出席をチェックした後、講師、担当ナビゲーターが読み返すことで、講義内容のチェック、学生の反応はどうであったのかを吟味した。

各学期担当の2人のナビゲーターは、担当学期が終了すると、学生の反応や理解の様子を確認するために、学期末テスト期間を用いて2000字程度のレポート(試験というようなものではなくて)を提出させた。担当のナビゲーターは、それを読みそこから、各コースの良かった点、課題等を抽出した。また、必要があれば、授業時に学生との討論(フォーラム)を行うなど、できるだけ受講している学生との会話や文章によるキャッチボールを行うよう努力した。

1年間を通して提出されたレポートは膨大な量であった。また、講師が学生に配付した資料も膨大な量になった。これらは、われわれナビゲーターにとって、これから体育の教官として活動していく上で貴重な財産となるであろう。

これまで、体育センターでは「メディアに見るスポーツ」や「スポーツその遺産」といった過去の総合科目で蓄積した大いなる遺産がある。それらをもとに、平成14年度は「スポーツへの冒険II」が開講される。スポーツへの理解者を増やしていくための更なる発展が期待される。このことは、筑波大学体育系の発展にも繋がっていくはずである。

英 訳 名	Adventure into Sport	責任者 (成績報告者)	山田 幸雄 (体育科学系)
開設学群	体育専門学群	研究室	体育科学系棟 A321
曜 時 限	通年 月曜日2限	オフィスアワー	
単 位 数	3 単位		
標準履修年次	1・2年		

目的・特徴

この授業の終盤には冬季オリンピック・ソルトレイク大会が始まり、来年の今ごろはサッカーW杯開幕を目前に控えている。地球が、スポーツの歓喜に抱擁される2002年に向け、スポーツをより深く愉しむ視線を、この授業を通して鍛えてほしい。  
 わざわざスポーツについて考えたり学んだりしなくても、すでに、高校までの体育と部活のおかげでスポーツのルールや戦術などには熟知しているし、加えて、テレビや新聞などのマスメディアが、解説ばかりが劇的な感動すらも手取りばやく伝えてくれる。そのとおりかも知れないが、わたしたちは今回の冒険を通して、新たな知の光によって照らし出されるスポーツやアスリートたちの輝きに、しばし心を奪われるといった画期的経験をすることになる。

本授業では、スポーツの深奥に広がる世界を目指し大海原へと小舟を漕ぎ出す。異界探訪のコース(編)を6つ用意した。  
 1. オリンピック編 2. メディア編 3. ポリティクス編 4. 個人編 5. サイエンス・テクノロジー編 6. サッカーW杯編

どのコースも頼もしいナビゲーターと講師陣がガイドを務めるが、かれらが導いてくれるのは入り口まで。そこから先は各自が英雄のごとく知力と勇気を揮ってアプローチしてほしい。みごと冒険を成し遂げたときには新しいスポーツの価値が発見されると共に、これまでとは違う自分自身にきっと出会えるはず。それを約束するこの授業は、ナビゲーターと講師陣にとっても命がけの冒険なのである。

教材・参考文献

ビデオやスライド等の映像教材を効果的に活用し授業を行う。文献等については各講義担当者が授業時に適宜紹介する。

成績評価方法

冒険につきものの苦難や壁面に挑む意欲、そこから何かを貪欲に学びとろうとする態度、そしてその成果について評価する。  
 出席状況(20%)、毎回提出の感想文(200字程度/30%)、各編フォーラム終了後のレポート(2000字程度/20%)および学期末試験(30%)の成績等をもとに各学期の成績評定を行い、これを総合して最終の成績評定(単位認定)について検討する。

受験学生に就くこと

居眠り・内職は講義の魅力不足とナビゲーター・講師が反省するとしても遅刻・携帯電話はクラス・モチベーション掠奪の大罪。

各週授業計画

学期	週	月 日	講 義 題 目	講義担当者	所 属	講 義 概 要
1 学 期	1	4月16日	オリエンテーション	山田 幸雄 ほか	体育科学系	本授業全体の趣旨ならびに各編の計画内容についてその概要を説明し、授業に臨む受講生のモチベーションを喚起するほか、授業運営上の約束事項等について確認する。
	I. オリンピック編 ナビゲーター			白木 仁 (体育科学系)		
	2	4月23日	オリンピックの輝き	宮下 憲	体育科学系	「オリンピック憲章」に謳われるオリンピック精神をまさに競技において美しく体現してきたアスリートたち。近代オリンピック100年の記憶に刻まれた勇姿と物語にふれたい。
	3	5月 7日	オリンピック精神の記憶	白木 仁 ほか	体育科学系	スポーツに憑かれたアスリートたちを貫く今も昔も変わらぬエトスを感じてもらいたい。本学出身のオリンピック数名によるシンポジウムを予定している。
	4	5月14日	古代オリンピックの折り	真田 久	体育科学系	古代ギリシアのオリンピア祭がいかにして受け継がれ、そして時代を超えて再生させたのか。古代オリンピックにまつわる貴重な史料をもとに考証を試みる。
	5	5月21日	オリンピックの挑戦	阿部 生雄	体育科学系	巨大化、商業化、ドーピング…様々な問題を抱えるオリンピックだが、その水文化にあたって今わたしたちが考えなくてはならないオリンピック運動の本質とは何なのか。
	6	5月28日	オリンピック編フォーラム	白木 仁 ほか	体育科学系	
	II. メディア・スポーツ編 ナビゲーター			嵯峨 寿 (体育科学系)		
	7	6月 4日	CMにみるスポーツ-NIKEの戦略	嵯峨 寿 ほか	体育科学系	高らかなスポーツ賛歌と英雄崇拝が視聴者を挑発してやまないNIKEのCMメッセージについて、創業者や広告代理店Wieden&Kennedyの企業哲学にまで遡って解釈を試みたい。
	8	6月11日	スポーツイベントのメディアバリュー	松元 剛	体育科学系	アムフト世界王座を決めるSuper Bowlと、世界中を歓喜陶酔の渦に巻き込むオリンピックを事例に、メディアとしてのスポーツの総論と機能をあらためて考えてみたい。
	9	6月18日	美術にみるスポーツ表現	太田 圭	芸術学系	絵画ではスポーツのいかなる性質・側面がどのような手法で表現または再現されているのか。スポーツをモチーフに作品を制作してきた画家本人に動機や意図をうかがう。
10	6月25日	メディア編フォーラム	嵯峨 寿 ほか	体育科学系	1936年ベルリン五輪映画『オリンピア』はその美的表現内容の普遍性ゆえ皮肉にもナチのプロパガンダとして機能した。英の表現(制作)と享受(鑑賞)との間の亀裂を捉えたい。	
11	7月 2日	期末試験	白木・嵯峨	体育科学系	一学期に取りあげたオリンピック編ならびにメディア・スポーツ編での意欲・態度・成果等を総合的に問う。	



学期	週	月 日	講 義 題 目	講 義 担 当 者	所 属	講 義 概 要
2 学 期	Ⅲ. スポーツのポリティクス編 ナビゲーター 本間 三和子 (体育科学系)					
	1	9月 3日	採点競技の政治学	本間 三和子	体育科学系	私はシנקロナイズドスイミングの競技者として数々の国際競技会に出場し、引退後の現在は国際審判員を務めているが、女性の目、採点競技審判員の目からみたスポーツにつきまとう何とも不可解な現象と経験をふりかえりたい。
	2	9月10日	コロナリズム —大英帝国の亡霊	山田 幸雄	体育科学系	近代スポーツはいち早く産業革命を成し遂げたイギリスの植民地政策によって世界各地へ伝播した。大英帝国時代へのノスタルジアが宿るテニスの聖地ウインブルドンにイギリスの国家戦略をさぐる。
	3	9月17日	身体の所有権	近藤 良享	体育科学系	ケガを押ししてもスポーツを続けたいという選手に対し、競技団体はノーという。ボクシングの辰吉選手の事例から、自分の身体は誰のものか、自己決定にはどんな原則があるのか、所有のエチカを考える。
	4	10月 1日	スポーツと民族対立	阿部 一佳	体育科学系	冷戦終焉と共に地球上で勃発した民族紛争はスポーツの世界にどのような状況変化をもたらしただか。国際状況に翻弄されるアスリートたちの葛藤を通して民族問題を考える。
	5	10月15日	ポリティクス編フォーラム	本間 三和子 ほか	体育科学系	
	Ⅳ. スポーツの偉人編 ナビゲーター 鍋倉 賢治 (体育科学系)					
	6	10月22日	限らない自己との対話	鍋倉 賢治	体育科学系	人はなぜ走るのか？ 肉体の極限まで酷使するマラソンは、「コントロールのスポーツ」という意味で、実は最も人間的であり、最も知性的なスポーツの一つである。マラソンの神にみそめられたランナー、翻弄されたランナー…。
	7	10月29日	人類最速への挑戦	宮下 恵	体育科学系	わずか10秒間で勝負を決するスプリンター。その一瞬のために、人生の全てを賭けている。「〇〇一連の男」という称号に魅せられたスプリンターの生き様を通して100メートル走の魅力に迫る。
	8	11月 5日	「一本」を求めて	小侯 幸嗣	体育科学系	山下泰裕、田村亮子をはじめオリンピックに魅了された偉大な柔道家達、日本伝統の「柔道」の枠にこだわらず「JUDO」として国際化を推進してきた柔道の魅力と本質について著名選手を通して語る。
	9	11月12日	剣の達人	鍋山 隆弘	体育科学系	少年から高齢者まで日本で親しまれてきた剣道とは何か、武道？ 格闘技？ それともスポーツ？ 剣道に付随する数々の「教え」を剣の達人を通して探り、「剣道とは何か」を考えてみたい。
10	11月19日	偉人編フォーラム	鍋倉 賢治 ほか	体育科学系		
11	11月26日	期末試験	本間・鍋倉	体育科学系	二学期に取りあげたポリティクス編ならびに偉人編での意欲・態度・成果等を総合的に問う。	
3 学 期	Ⅴ. スポーツのサイエンス・テクノロジー編—2002ソルトレイク冬季五輪への誘い ナビゲーター 山田 幸雄 (体育科学系)					
	1	12月 3日	スキー用具の変遷と技術	井村 仁	体育科学系	スキーは、その名称が道具を意味するように、道具と技術とは密接に関連している。現代では様々なスキー用具が登場し、多様な楽しみ方がなされている。スキー用具の変遷と技術との関連について考える。
	2	12月10日	スラップスケート	阿江 通良 (湯田 淳)	体育科学系	スピードスケートのブレードはスラップスケートが主流となり、それまでの記録を大きく塗りかえた。スラップスケート誕生の経緯をたどり、その威力を科学的に解明する。
	3	12月17日	スキーウェアの革新	板垣 良彦 (榎)デサント	体育科学系	スキー競技のタイム短縮と飛距離向上に貢献してきたスキーの発展を、素材やデザインの面からたどり、その改良が技術や記録に及ぼした影響を検証する。
	*	12月25日	サイエンス編フォーラム	山田 幸雄 ほか	体育科学系	
	Ⅵ. サッカー・ワールドカップ編—2002 KOREAN-JAPANへの誘い ナビゲーター 田嶋 幸三 (体育科学系)					
	5	1月21日	サポーターカルチャー 研究からみたW杯	清水 諭	体育科学系	*企画段階から本編の開設は決まっていたが、講義題目や講師など詳細については未定であり、直前になって左記のようなプログラムが立った。従って、ここに掲載すべき講義概要については、本文を参照されたい。
	6	1月28日	W杯開催に期待する心の 交流を広げよう	金 貞 淑	元筑波大学 外国人教師	
7	2月 4日	with Korea W杯成功への道	慎 武 宏	作 家		
9	2月18日	W杯絶対ここに注目!	田嶋 幸三	体育科学系		
10	* 2月27日	期末試験	山田・田嶋	体育科学系	三学期に取りあげたサイエンス・テクノロジー編、サッカーW杯編での意欲・態度・成果等を総合的に問う。	
11	3月 4日	総まとめ	山田 幸雄	体育科学系		